

生徒・学生の進路選択の要因並びに キャリア教育の在り方に関する研究

光 友 剛

目 次

はじめに

1. 生徒・学生の進路意識と学校選択・決定の要因傾向
 - (1) 中学校・高等学校生徒の進路意識と進路指導の重要性
 - (2) 学校選択・決定の要因とその傾向
 - (3) 大学生の進路意識と職業選択の要因傾向
 2. キャリア教育の在り方
 - (1) 「職業指導期」から「進路指導期」さらに「キャリア教育期」へ
 - (2) キャリア教育の在り方
先導的実践—中・高連携研究実践からキャリア教育の在り方〈視点1～視点10〉を求める
- おわりに

はじめに

本稿は(1)中・高校教師が、生徒の人生における幸せを願いながら、教育現場にあって特に苦勞し、指導の手だてを求めているのにこたえるために、生徒の姿を直視して、特に、中・高校生を中心に自らの進路選択、決定の姿勢がどのようなものであるのかを追求し、指導の指針を得ようとするものである。

この課題追求にあたっては、生徒自らの進路上の不安・悩み、学校選択にあたってのよりどころ（選学基準）に分析検討の視点を置き考察し進路選

にあたっての指導の指針を得たい。

さらに、本稿は、(2)人生における在り方、生き方指導としてのキャリア教育の在り方を求めようとするものである。

G・E. Myers⁽¹⁾は、次のようにのべている。

“One’s job is the watershed down which the rest of one’s life tends to flow.” Because of its stronger appeal and greater human interest, vocational guidance may well receive consideration first.

G・E. Myers の言うように、ひとの仕事は、分水嶺であって、ひとの生活の他の部分は、そこから流れ出ようとする。このことは、人の心により強く訴え、より大きな人間的興味をいだくが故に、職業指導はまず第一に考えられる教育としての大切な指導である。

また、Super, D. E. の成長段階、探索段階、維持段階、確立段階、下降段階の人間の全生涯にわたる職業的発達理論（1957年）がある。

筆者がこれらの書に興味深く触れたのは、職業指導免許取得をめざした1955年（昭和30年）で以来筆者の48年余の教職人生の間に、人間の発達課題に即した、生涯における生き方・在り方教育としての職業指導期そして進路指導期（これまでもキャリア教育の胎動期）さらに現在のキャリア教育に移行している。

「今、なぜ、キャリア教育なのか。その指導の在り方は。」の小・中・高校現場教師の関心が高まっている折であるので、キャリア教育の実践者のひとりとして、これまでの学校における教育実践をふまえてキャリア教育の在り方を論述しようとするものである。

1. 生徒・学生の進路意識と学校選択決定の要因傾向

(1) 中学校・高等学校生徒の進路意識と進路指導の重要性

①中学校生徒の進路意識と進路指導の重要性

中学生は、理想や本来の自分の姿を追い求め、大きく前進したい思いを抱

いている。しかし、逆に、感情や行動の赴くままに行動し自分の弱さに嫌悪感を抱いたり、また、さまざまな葛藤、経験の中で不安や悩みを感じる。このように大きく、激しい心の揺れを経験しながら、自己を探索・確立していく時期である。

筆者が中学生（各学年100名）を対象に、なやみ調査（1996年）を実施した結果によると、勉強や成績についての悩みが、1年生56%、2年生68%、3年生88%であった。また、本論文で課題とする進路（進学、就職など）についての悩みは、1年生38%、2年生57%、3年生81%と次いで高い。しかも学年がすすむにつれて悩みが多くなっている。中学校における十分なカウンセリングを含むガイダンス⁽²⁾としての進路指導 Career development Guidance の重要性を再認識せざるを得ない。

このような進路についての悩みに対して筆者らは、生徒への質問カード（進路相談カード）を利用したのカウンセリングによる手法を通して不安・悩みの根源をさぐりながら、特に個々の生徒の内面に触れ、その解消に努めた。学校選択に関わる不安・なやみをあげると資料(1)の如く生徒にとって極めて深刻なものがある。

中学生の時期は、心身両面にわたる発達が著しいが故に、不安や悩みを抱くことも多く、また、他者との連帯を求めると同時に主体的な自我の確立を求め、自己の生き方についての関心が高まる時期でもある。やがて人生観や世界観、価値観を確立していく大切な時期である。

進路指導と特に関連深い、学校における道德教育では「人間としての生き方についての自覚は、全学年を通じ、学校教育のあらゆる機会をとらえて指導するとともに、すべての内容項目が、「人間としての生き方についての自覚」とかかわるように配慮しながら指導する必要がある。」⁽³⁾とのべている。

わが国における進路指導の出発点は、昭和2年11月「児童生徒ノ個性尊重及職業指導ニ関する件」⁽⁴⁾文部省の訓令の通達に求めることができる。すなわち、児童・生徒の個性の尊重を重視するとともに職業指導が学校教育のなかに明確に位置づけられ、個性に基づき適切な職業や学校を選択させる指導

資料(1) 主な進路に関する不安・なやみ

※特に、学校選択に関わるものを中心にあげる。

<p>↑ 進路情報(学校情報) ↓</p>	<p>○高校に進みたいが、どのような高校があるのか、わからないで困っている。(2年生)</p> <p>○自分が行きたい高校がきまらないで不安。(3年生)</p> <p>○進学したいが、家が経済的に良くない。どうしたらよいか。(3年生) (奨学金、働きながら学ぶ面含む)</p> <p>○自分の個性がわからない。自分の個性を知る方法は。(2年生) 進学したいが、できるだろうか。</p> <p>○自分が行きたい高校をどうやって見つければよいか、不安である。(3年生)</p>
<p>↑ 進路全般に関わる相談 ↓</p>	<p>○今、これといった目標がない。どうしたらよいか悩んでいる。(2年生)</p> <p>○将来のことがまだ、決めきれず困っている。(3年生)</p> <p>○親とあまり話さない、どうしたらよいか。(2年生)</p> <p>○親がもっと勉強しろと言う、きつい。(1年生)</p> <p>○親が高望みする。進路のことでも悩んでいる。(3年生)</p> <p>○親が自分の気持ちを分かってもらえない。(1年生)</p> <p>○進路のことで家のだれとどんなふうに相談したらよいか。(3年生)</p>
<p>↑ 特に学校情報に関わる相談 ↓</p>	<p>○自分がどの学校に向いているか、わからず困っている。(3年生)</p> <p>○工業高校を希望しているが、これからどうしたらよいか。(3年生)</p> <p>○偏差値が低い。進学できるか悩んでいる (3年生)</p> <p>○目標校を決めているが、学習面で不安。(3年生)</p>
<p>↑ 特に学業に関わる相談 ↓</p>	<p>○勉強しても意味がない気がする。(3年生)</p> <p>○勉強しても成績が上がらない。(1年生)</p> <p>○勉強の方法がわからない。進学できるだろうか不安。(1年生)</p>

(出所) この資料は、筆者らの県研究指定委嘱進路指導研究 T 中学校の相談記録 (1996 年) から作成したものである。

が促進されるようになったのである。そして、昭和22年3月制定の学校教育法第36条2（中学校教育の目標）「社会に必要な職業についての基礎的な知識と技能・勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」とのべられ、以来、進路指導が進められてきた。

中学校・高等学校進路指導の手引（文部省）には、「進路指導は、人間としての生き方の指導である。将来の進路の選択は、人間としての生き方の選択でもある。人間は、自分の選んだ進路（職業）によって、その生活様式から、ものの見方・考え方や価値観、さらに生活の範囲までにわたっての進路に特有な在り方が展開される場合が多い。進路指導は、個々の生徒に、自分の将来をどう生きることが自分にとって喜びであるのかを感得させなければならないし、生徒各自の納得できる人間の生き方を指導することが大切である。」^⑤とのべている。

さらに、今度の新中学校学習指導要領の総則、教育課程編成の一般方針1で、「学校の教育活動を進めるに当っては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」^⑥とのべており、法及び学習指導要領の角度からも進路指導が極めて重要である。教師の進路指導に対する再認識と実践的指導力が期待される。

②高等学校生徒の進路意識と進路指導の重要性

筆者は高校生を対象に調査した結果をもとに、高校生活の様態について考察したい。

この資料によると、調査対象全体で「満足」と「やや満足」と答えた生徒が合わせて49.7%で残りの生徒は満足感をいっていない。科別では、不満足感をいなく生徒が普通科で44.6%、農工商の学科で55.5%、普通科に対して職業科が約10%多い。

明るい将来への希望を胸にひめ、進学を実現した生徒が、学校生活に満足せずして意欲的な高等学校生活をおくるとは考えられず、日々の学習もあな

資料(2) 高校生活の満足感

		イ	ロ	ハ	ニ	注) ●現在の高校生活に満足していますか。
		14.8	34.9	33.5	16.8	
科別	全体	14.8	34.9	33.5	16.8	イ、満足 ロ、やや満足 ハ、やや不満足 ニ、不満足
	普通科	17.1	38.3	30.0	14.6	
	農工商科	12.6	31.9	37.0	18.5	
1年	全体	18.8	35.1	30.9	15.2	イ、満足 ロ、やや満足 ハ、やや不満足 ニ、不満足
	普通科	18.7	40.0	26.3	15.0	
	農工商科	18.8	30.6	35.3	15.3	
2年	全体	9.0	35.3	34.1	21.6	高校生495名
	普通科	12.5	42.5	25.0	20.0	
	農工商科	5.7	28.7	42.5	23.1	
3年	全体	16.7	34.6	35.8	12.9	高校生495名
	普通科	20.0	32.5	38.7	8.8	
	農工商科	13.4	36.6	32.9	17.1	

(出所) この資料は、筆者が調査した結果をもとに作図したものである。(2005年)

がちおろそかになることも考えられる。そこには、展望に満ちた明るい前向きの姿勢をもみいだせない。

次に、進路に関する不安やなやみについてみてみよう。自ら、進路選択にのぞみ、決断して現在、在学している高校生は、どのような不安やまよいをいっているであろうか。資料(3)によると、a、b項目は高校卒業後の就職や進学について、c、dは、興味・性格・適性面で、また、e、fは、進学・就職の志望変更からくる不安やまよい、gからjは、高卒後の不安やまよい、さらには、kからmは高卒後の不安やまよい等々がある。

この資料によると

- イ. 職業科生で就職志向での不安、まよいで、a. 就職先理解が不十分49.4% g、h、I、J 高卒後の希望職業への就職不安がそれぞれ60.6%、53.1%、38.1%、33.4%と普通科生のそれと比較して高い有意差が認められる。
- ロ. 一方、進学志向で、b、進学先不理解、k、I、m、oの希望大学進学への不安等の比率が職業科生より高い。
- ハ. 興味、性格、適性などから、この学校・学科に適していないのではない

資料(3) 進路についての不安やまよい

項	目	普通科 %	職業科 %	検定結果
a、	いまの高校卒業後の就職先についての理解が不十分などでこまっている。	9.1	49.4	※※※ ※
b、	いまの高校卒業後の進学先についての理解が不十分などでこまっている。	42.1	23.5	※※※ ※
c、	自分の興味、性格、適性などからみて、この学校・学科は適して なないのではないかと思ひ勉強などにもはげみがでない。	10.4	27.5	※※※ ※
d、	自分の興味、性格、適性などからみて、この学校・学科は適して いないので転学または転科しようと思っている。	2.9	6.7	
e、	高校卒業後、すぐ就職するつもりで進学したが、在学中さらに進 学したい気持ちにかわり、どうしようかとこまっている。	2.9	20.8	※※※ ※
f、	大学進学のために、この高校に入学してきたが、高校卒業後すぐ 就職したい気持ちにかわりどうしようかとこまっている。	4.5	5.5	
g、	いまの高校卒業後、すぐ、自分が希望する職業につけるかどうか 不安である。	12.1	60.6	※※※ ※
h、	いまの高校卒業後、すぐ、自分が希望する職場につけるかどうか 不安である。	8.7	53.1	※※※ ※
i、	いまの高校卒業後、いくつか考えているどの職業についたらよい かまよっている。	4.5	38.1	※※※ ※
j、	いまの高校卒業後、いくつか考えているどの職場についたらよい かまよっている。	1.2	33.4	※※※ ※
k、	いまの高校卒業後、希望している大学の学部で合格できるか不安 である。	64.1	18.4	※※※ ※
l、	いまの高校卒業後、希望している大学の何学部を受験しようかと まよっている。	37.5	7.0	※※※ ※
m、	いまの高校卒業後、ある学部へすすみたいが、どの大学を受験し たらよいかまよっている。	31.6	12.9	※※※ ※
n、	自分がつきたい職業と両親がすすめる職業とのくいちがいこま っている。	8.7	18.8	※※※ ※
o、	自分がすすみたい大学と両親がすすめる大学とのくいちがいこま っている。	12.1	4.7	※※※ ※
p、	その他、進路のことでの不安やまよいがあつたら()にかいて ください。	4.7	7.8	

Pのその他 進路についての不安やまよい

- ・いまの学校で学習しない科目が大学受験の科目にあるので不安(商業科3年女子)
- ・普通科の単位数が他校より低いのでこまっている。(農業科3年男子)
- ・この学校をでたら、どのような職業につくのがよいかわからない。(農学科1年男子)
- ・進路がきまらないというより、むしろ、進路についてさせているような感じがすこし不安(工業科2年男子)
- ・就職と夜学の両立ができるか不安(工業科3年男子)
- ・自分の適性がほんとにわからない。(商業科2年男子)
- ・商業科からの進学希望で、どのような勉強をしたらよいかわからないでこまっている。(商業科2年女子)
- ・自分の能力を考えると、高卒、大学卒のどちらの場合が現代社会における生活に有利であるかわからない。(商業科2年男子)
- ・自分が希望する大学は、経済的にも無理だし、親の許しが得られなくてこまっている。(普通科3年男子)
- ・希望する大学の受験に落ちたら、当然就職することになるがほんとうに不安(普通科3年女子)など

(注) 普通科在学生240名、職業科在学生240名 ※※※P<.005

(出所) この資料は、筆者が調査、統計処理して作成したものである。(2005年)

かと思ひ勉強にもはげみがでない者が、普通科生10.4%職業科生27.5%あり共に問題で、特に、職業課程に学ぶ生徒のそれが高いのは大きな問題である。

二. 高校卒業後、すぐ就職するつもりで進学したが、進学志向にかわりこまっている生徒が職業科生に20.8%いること、また、P項目では、表に示す如く、各生徒が抱えている不安やまよいの面を知ることができる。

筆者の同調査の別項目「進学前の志望と現在、在学中の学校・学科と一致しているか」で、「学校・学科とも一致」と答えた者が全体で42.8%である。科別では、普通科生49.1%に対して、農工商科生36.9%と普通科生より12.2%多い。次に「学校は一致しているが、学科は不一致」の生徒が10.9%で普通科生4.6%であるのに対して、農工商科生では、16.9%と高い。「学科は一致しているが学校は不一致」は全体で31.1%、科別で、普通科生40%、農工商科生で22.7%となっている。さらに「学校も学科も不一致」に注目すると、全体で15.2%普通科生6.3%に対して、農工商科生が23.5%と予想以上に高い比率を示した。本論文が問題視する進路決定、特に学校選択上の問題点があることを指摘しておきたい。

お茶の水大学教授 河野重男氏は、「不本意入学、中途退学者の増大」に触れ、「学校に不満、不適応をもつ者が増大している。21世紀への課題として、主体的な学習意欲と意志の力を持った人間を形成していかなければならない。このことは、進路指導という点から挑戦していかなければならない1つの大きな問題である。」⁷⁾と警鐘を鳴らしている。

筆者は、以上、のべてきた中学校・高等学校生徒の学校生活の様態から、これからの進路指導の在り方を再考しながら、進路指導上の学校選択決定の要因について考察してみたい。

(2) 学校選択・決定の要因とその傾向

筆者は、次の進路指導の本質的立場から、この項の考察を試みたい。「進路指導は、自己の能力・適性等の正しい把握に基づいて、将来の進路を選

択・決定していくものであり、将来の生活において、自己実現の可能性を高めたいとする人生設計や生き方の指導・援助であるから、職業観や勤労観、勉学観、更にその基底となる人生観・世界観の確立の援助が重要な指導内容となってくるわけである。」^⑧と文部省「中学校・高等学校 進路指導の手引」でのべている。

筆者は、学校選択・決定の要因についての調査研究を次のべる考え方に立つて行うことにした。

山形大学、伊藤惣右衛門教授は「職業の決定主体に関する問題」のなかで、「職業決定にあたって、本人が如何なる態度をとるかという所に注目するならば、自律的態度、依存的態度、協議的態度である。」^⑨とのべており、筆者は、この教授の視点に示唆を得て、選学・決定にあたって次の点を明らかにしたい。

イ. 自分がすすみたい学校・学科の選定で自分の特性等に照らしてなされる選学意識の要因 — 筆者は〔個人的要因〕とよぶ。

ロ. 家族など周囲の人の意志が関与する選学意識の要因 — 〔対人的要因〕

ハ. 現実存在していることに、即してなされる選学意識の要因 — 〔現実的
的要因〕のそれぞれについて、資料(4)に示すように、(一)について、7
項目、(二)について、9項目、(三)について、15項目の各項目毎に、選
学の際「じゅうぶん考えた」「少し考えた」「考えなかった」とその意識の
深さを問う質問紙を作成した。

「あなたは、中学生のとき、いま、在学している学校・学科をどのような
気持ちや考えで決めましたか。」を実際に選学を経験をした高校生を対象に
調査した結果をあげると資料(4)の如くである。

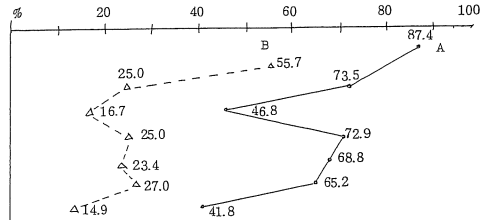
①学校選択・決定の要因全体の傾向

資料(4)によると、個人的要因での、「学業成績と合格の可能性」が予想ど
おり87.4%（意識の深さでみれば、じゅうぶん考えたと答えた者が55.7%）
と1番高く、次いで、対人的要因の両親のすすめが、80.2%（意識の深さで
みれば、じゅうぶん考えたと答えた者が、25%）3番目に高いのが、現実的

資料(4) 選学の要因傾向

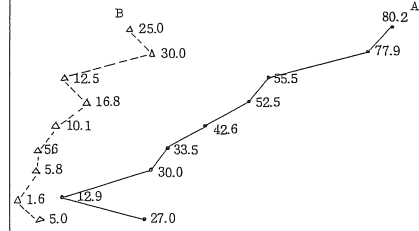
(一) 個人的要因

1. 学業成績と合格の可能性
2. 興味・性格・適性
3. クラブ活動・趣味・特技
4. 豊かな教養
5. 授業についてゆけるか
6. 高卒後の希望職業(職場)実現
7. 大学卒後の希望職業(職場)実現



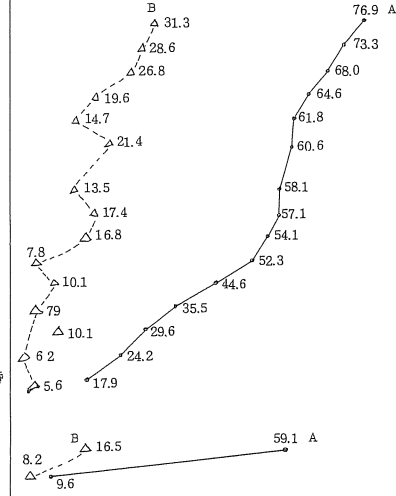
(二) 対人的要因(役割的要因)

1. 両親のすすめ
2. 先生のすすめ
3. 友人のすすめ
4. 親しい友人の進学
5. 兄姉のすすめ
6. 親類・知人のすすめ
7. 兄姉の在学・卒業
8. 高校に知っている先生
9. 高校に知っている先輩



(三) 現実的要因

1. 通学の便しさ
2. 授業料等の諸経費
3. 家庭の経済事情
4. 校風・伝統・環境
5. 有名校
6. 学習内容がこれからの社会にとってますます重要か
7. 学習科目の単位
8. 進学率
9. 就職率
10. 施設設備
11. 男女共学
12. 卒業生の社会的活動・昇進および結婚
13. 男女別学
14. 父(母)の職業の立場
15. 父(母)の職業をつぐ立場



(四) その他

1. とにかくこの学校・学科
2. その他

注) 高校生495名による

A 「じゅうぶん考えた」、「少し考えた」者の合計を示す

B 「じゅうぶん考えた」者を示す

(出所) この資料は、筆者が調査統計をもとに作成したものである。(2005年)

要因の通学の便利さが、76.9%（意識の深さからみれば、じゅうぶん考えたと答えた者が、31.3%）となっている。また、それぞれの項目の示すことがらが、生徒の学校選択決定に影響を及ぼしていることがわかる。

筆者は、この要因の考察をするにあたり、高校生活を体験してその反省から、中学生にたちかえり、もう一度選学するとしたら、どんな基準で行うかを問うてみることにした。

中学生のときの「選学基準」となる要因を「進学前の要因」進学してみたの「選学基準」となる要因を、「進学後の要因」と呼ぶことにし、前後の選学意識の変容をみることにした。

次に、学校選択にあたっての要因傾向と意識の変容を考察したい。このことを通して進路指導の在り方をのべたい。

②進学前の「選学要因」と進学後の「選学要因」についての考察

イ. 資料(5)では、「学業成績と合格の可能」で、考えた者の比率が、進学前87.4%だったのに対し、高校生活体験後の選学意識では、94.5%となっている。（意識の深さで「じゅうぶん考えた」の比率が、55.7%だったのが69.8%と14%高くなっている。やはり、この要因は、選学のさいの大きな要因になっている。

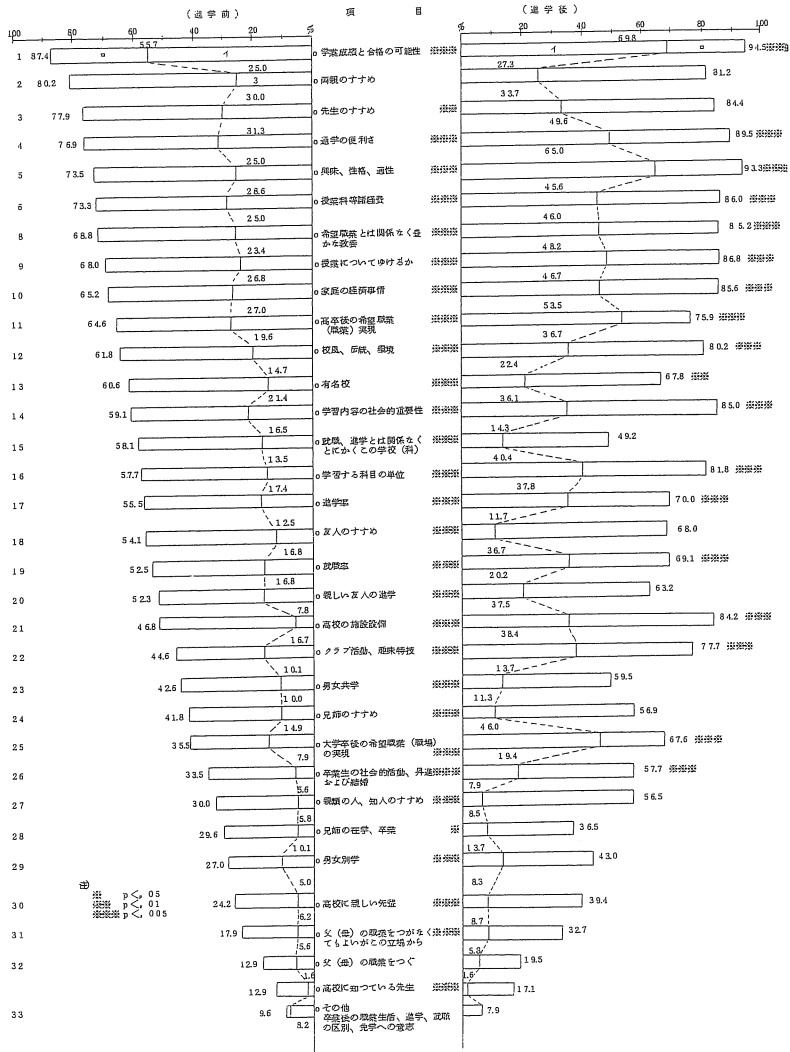
ロ. 次に、選学にあたって、興味・性格・適性の面から考えた者の比率が73.5%だったのに対して、進学後は93.3%（じゅうぶん考えたという意識の深さからみると進学前25.0%から、進学後65.0%になり、実に40%と高い比率を示している。この大きな変容は、進路指導にあたって「興味・性格・適性」の面からの指導が、いかに大切かを教えてくれる。

ハ. 「高卒後に希望職業（職場）につけるか」で、進学前65.2%が進学後75.9%、じゅうぶん考えた者が27%だったのが、高校生活を経験した後の意識では53.5%と約27%も大きく変容している。

③普通科と職業科（農・工・商）との比較考察

普通科と職業科との比較で、特に、有意差がみられる要因を、資料6をもとにみてみたい。

資料(5) 進学前の選学要因と進学後の選学要因の比較



(注) 中央項目横の※は、じゅうぶん考えた、少し考えたの合計どうしの検定で、右端の※印はじゅうぶん考えたと答えた者どうしの比較検定である。

(出所) この資料は、筆者が、高校生495名について調査した結果をもとに分析作成したものである。(2005年)

イ．興味・性格・適性の面では、特に重視されなければならない職業課程生が普通科よりわずか10%多いだけである。筆者が別項の調査で「興味・性格・適性からみて、この学校は自分に適していない」と答える者が職業科生で、27.5%いて普通科生より17%も多い。学校教育法第36条2項をあげるまでもなく、個性を重視した進路選択の指導がのぞまれる。

ロ．普通科と職業科では、教育内容に大きなちがいがあるので、科別に比較してみると、職業科の方が、選学の基準として「科目の単位」をつよく意識している。 $P<.001$

このことは、中学校における学校情報特に、自分が進みたい学校についての理解が不十分であったことを示している。

教師は、高等学校についての十分な理解をさせておくべきである。

進路指導の活動領域としては、「①生徒理解及び自己理解を深める活動、②進路に関する情報資料を学ぶ活動、③啓発的経験を深めさせる活動、④進路に関する相談活動、⑤就職や進学に関する指導・援助の活動、⑥卒業者の追指導に関する活動」⁽¹⁰⁾の6分野（教育的機能からすれば、中学校・高等学校における進路指導の6機能）があげられる。

これらの教育的活動を通じて、「生徒一人ひとりに、自己についての理解、進路情報についての理解、自己と進路との関係を吟味・検討し、生徒が自分の進路を自分の意志と責任で、希望と目的意識をもって主体的に選択・決定できるように指導・援助するのが、進路指導の立場である。」⁽¹¹⁾ことをしっかりとふまえて努力する教師の役割が期待される。

筆者が作成委員長で、福岡県教育庁課長・指導主事らと作成した「進路指導の手引」（福岡県教育委員会 平成5年）のQ & A「偏差値に頼らないで、高校を選択せよと言われますが、特に、公立普通科について、どのようにして特色をとらえて選べばよいでしょうか。」⁽¹²⁾をあげると資料(7)の如くである。

あえてこの平成5年の手引をあげたのは、福岡県教育委員会が、教育長名で各市町村教育委員会教育長宛に「進路指導の改善・充実についての通知」

資料(6) 普通科と職業科との間に有意差がみとめられるもの

進 学 前 %	項 目	進 学 後 %
※※※ { 68.3 普通科 78.3 職業科	興味・性格・適性	
※※ { 76.7 普通科 70.4 職業科	豊かな教養	
※※※ { 52.9 普通科 80.4 職業科	高卒後の希望職業(職場)の実現	普通科 60.4 } ※※※ 職業科 90.8 }
※※※ { 75.8 普通科 54.6 職業科	校風・伝統・環境	普通科 87.5 } ※※※ 職業科 73.3 }
※※※ { 73.7 普通科 52.9 職業科	有 名 校	普通科 75.0 } ※※※ 職業科 62.1 }
※※※ { 54.2 普通科 67.1 職業科	学習内容の社会的的重要性	
	高卒後の就職、進学とは関係なく とにかく学校、学科	普通科 44.2 } ※※※ 職業科 53.7 }
※※※ { 49.6 普通科 67.5 職業科	学習科目の単位	普通科 75.8 } ※※※ 職業科 87.5 }
※※※ { 71.2 普通科 45.4 職業科	進 学 率	普通科 85.4 } ※※※ 職業科 55.4 }
※※※ { 37.1 普通科 71.2 職業科	就 職 率	普通科 55.8 } ※※※ 職業科 81.7 }
※※※ { 42.5 普通科 51.7 職業科	クラブ活動・趣味・特技	
※※※ { 49.6 普通科 40.0 職業科	男女共学	普通科 64.2 } ※※※ 職業科 56.2 }
※※※ { 37.5 普通科 50.0 職業科	兄妹のすすめ	普通科 53.3 } ※※※ 職業科 62.1 }
※※※ { 62.5 普通科 23.3 職業科	大学卒後の希望職業(職場)実現	普通科 86.2 } ※※※ 職業科 50.8 }
※※※ { 30.4 普通科 41.7 職業科	卒業生の社会的活動・昇進および 結婚	
※※※ { 25.4 普通科 35.4 職業科	兄妹の在学・卒業	普通科 30.4 } ※※※ 職業科 43.3 }
※※※ { 18.6 普通科 29.6 職業科	父(母)の職業の立場	普通科 25.8 } ※※※ 職業科 9.6 }
※※※ { 8.7 普通科 27.5 職業科	父(母)の職業をつぐ	普通科 12.1 } ※※※ 職業科 27.1 }

(注) 比率はイ、じゅうぶん考えた(考えると口、少し考えた(考える)をあわせたものによる。

※※ $P<.01$ ※※※ $P<.005$

(出所) この資料は筆者が普通科240名、職業科240名の調査結果をもとに作成したものである。(2005年)

資料(7) 福岡県「進路指導の手引」Q & A

Q ⑨ 偏差値に頼らないで高校を選択せよと言いますが、特に、公立普通科について、どのようにして特色をとらえて選べばよいのでしょうか。

A
中学校では、上級学校に関する情報を見学や体験入学などを通じて、体験的に収集する活動などを行います。高等学校では、特色ある学校づくりを推進する観点から広報活動を充実させています。このような活動を活用して各学校の特色をとらえ、自己の進学の意識に照らし適切な学校であるかを確かめましょう。
高等学校にあっては、平成6年度から特色ある学校づくりや多様な入学者選抜が導入される予定でありますから、今後の動向に留意して下さい。

- 1 高等学校に関する啓発的体験の活動の機会を活かしましょう。
 - (1) 体験入学への参加
 - ・ 職業に関する学科だけでなく理数科及び特色あるコース(英語、体育、国際文化、芸術など)で体験入学を実施しています。今後、普通科での実施も可能になります。
 - ・ 学習内容の体験や施設・設備等の見学等ができます。
 - ・ 生徒だけでなく保護者も参加でき、進路相談も受けられます。
 - (2) 生徒による訪問・調査の活動
 - ・ 学級活動の年間計画(第2又は3学年)に上級学校の訪問・調査を位置付け活動します。
 - ・ 調査項目は、次のような内容があります。
 - ① 教育方針と重点、歴史と伝統
 - ② 主な大学、事業所等への進学・就職状況
 - ③ 施設・設備
 - ④ 部活動の活動状況(部の種類、練習時間等)
 - ⑤ 主な行事(中学校にない行事)
 - ⑥ 規則・規律
 - ⑦ 学校と学校生活(学習内容、時間割等)
 - ⑧ 本校卒業生の活躍状況

- 2 県立高等学校案内「展望」(県教育委員会発行)を活用しましょう。
「展望」は、各中学校に配布されており、次のような内容で構成されています。
 - (1) 県立高等学校の概要
 - ・ 全日制課程、定時制課程、通信制課程の教育内容
 - ・ 高校入試の概要
 - (2) 各高等学校案内
 - ・ 設置学科等
 - ・ 本校のめざす生徒像
 - ・ 本校の特色ある教育活動(学習活動、部活動)
 - ・ 本校の教育課程
 - ・ 卒業生の進路
 - ・ 学校から一言
- 3 高等学校の広報活動を活用しましょう。
 - (1) 学校案内やビデオの活用
 - ・ 学校案内(パンフレット)を作成しています。また、ビデオによる学校案内を作成している学校もあります。
 - (2) 学校訪問の実施
 - ・ 団体(P.T.A.等)だけでなく個人でも学校訪問ができます。
 - ・ 文化祭や体育祭など学校公開の機会も利用できます。
 - (3) 説明会の実施
 - ・ 進路指導担当者等を招いて説明会を行うこともできます。

(出所) この資料は、福岡県教育委員会「進路指導の手引」より、掲載したものである。

で、平成5年2月22日文初高第243号文部事務次官通知「高等学校の入学者選抜について」の業者テストによる偏差値に依存しない進路指導の改善と充実を指摘された年であるからである。

同手引書は、進路指導の転換を求め、改善・充実を期待するもので、資料(8)は、その「基本的な視点」⁽¹³⁾をあげたものである。

この通達以来、急速に高校体験入学等が本格化して現在に至っているが、選学上の指導の問題点が依然として指摘されている現状にある。

中学校3年間の期間に、生徒が、進路の問題を自分自身の問題として、しっかり受け止め、自分自身で解決する過程を通じて、自分の確固たる意志と責任で自分の進路を選択・決定する能力・態度を身につけさせる指導・援助を

資料(8) 指導の転換を図るための基本的な視点

進路指導を改善する上での課題は、業者テストに替わる適切なテストがあるか、あるいは、業者テストによって得られる得点や順位あるいは偏差値などの資料に替わる何らかの資料があるか、といったことではなく、業者テストに依存しているがために、本来の在り方を見失っている中学校の進路指導を抜本的に見直し、その在るべき姿へと指導の転換を図ることに注かなければならない。

各学校が、自校の進路指導を抜本的に見直し、指導の転換を図るに当たっては、まず、指導に当たる教師自身が、進路指導とは、何のために何をどのように指導すべきものであるのかと、その在るべき姿について理解を深めるとともに、それに照らして、自校の進路指導の現状の問題点を明らかにして、何を見直しどのように転換を行うのかといった視点を定めなければならない。

中学校の進路指導の一般的な状況からすれば、次のような視点を基本として、指導の見直し、指導の転換が図られるべきであろう。

(1) 学校選択の指導から生き方の指導への転換

生徒が、将来の生き方について多様な選択が可能であることを理解し、自己の進路を探索することを目指す指導・援助すること。

生徒一人一人は、それぞれ異なる興味・関心を持ち、独自の能力・適性をもって、他を模っては替えない個性的な存在であり、しかも、成長、発達の上において、多大の可能性を秘めた存在である。また、職業は多様・多岐であり、生活の有り様は多岐であって、人はそれぞれ、働きがいや生きがいを持ち、自分なりの職業生活や社会性を営んでいる。生徒は、自己の個性と将来の生活についての理解を深めるとともに、自己の可能性を信じつつ、自分なりの生き方を求めて、自己の進路を探索することにより、生き方の多様な選択可能性を理解し、将来の夢や希望を抱くことができるのである。

進路指導は、生徒の直面している進路先である高等学校等を選択するための指導ではなく、生徒が、自分なりの生き方を求めて、進路を探索し、中学生にふさわしい将来への夢や希望を抱くことができるよう指導・援助するものでなければならない。

(2) 進学可能な学校の選択から進学したい学校の選択への指導の転換

生徒が、将来の生き方に照らして、上級学校で学ぶ意義を理解し、目的をもって、進学したい学校を選択するよう指導・援助すること。

生徒は、目的を持ち、有意義な学校生活を送ることによって、自己の個性を一層伸長し、可能性を開花することができる。しかし、上級学校には、高等学校、高等専門学校、専修学校等の種類があり、高等学校を例にとれば、普通科、職業等に關する専門科目あるいは新しく設けられた総合科目などの学科や類型・コースがあって、校趣や学科等により、様々な教育内容や諸活動がある。そこで、生徒が、上級学校を選択するに当たっては、上級学校への進学を、自己の将来の夢や希望の実現を目指して行う進路探索の過程に位置付け、その意義を理解し、目的を持って、適切な学校・学科等を選択することが望まれる。

上級学校の選択の指導に当たっては、生徒が、上級学校で学ぶ意義を理解し、目的を持つとともに、上級学校の校風や教育内容等について、十分な情報を収集し、目的の実現に向かって、生き生きと学び、活動することができる学校を探し、自分が進学したい学校を選ぶことができるよう、指導・援助することが大切である。

(3) 生徒の志望の実現に向けて援助する指導への転換

生徒が、具体的な志望校を選択するに当たっては、日ごろの学習の成果等に基づいて助言し、志望の実現に向けて努力する過程を指導・援助すること。

生徒は、進学したい学校の中から、受験する学校一志望校一を選択することとなる。志望校の選択に当たって、生徒は、まず、進学したい学校について、入学希望方法や入学金・授業料、あるいは通学時間など、その学校に入学し、学び続けるための諸条件をより具体的に確かめるとともに、保護者等に相談して、進学希望校選定の可否を確かめる必要がある。次に、生徒は、教師との相談活動などを通じて、3年間の中学校生活における、学習や打ち込んだ諸活動の成果が、進学したい学校の入学希望校で求められる学力等の基準に照らして、ふさわしいものであるかを確かめなければならない。

生徒がこのような理解や判断をするに当たっては、蓄積した卒業生の進学実績などの諸データ等に基づいて、その生徒の日ごろの学習や諸活動の成果などから適切な指導・助言をするとともに、志望実現の障害になると予想される学習上の弱点の克服を援助するなど、志望実現に向けての悩みや不安の解消に努め、生徒が意欲を持ち、努力し続けるよう指導・援助する。

すなわち、生徒の合格を願うのはいうまでもないが一人一人の生徒に100%の合格可能性を「保証」するために、偏差値を基にした編割りの進路指導を行い、偏差値に見合うか否かにより特定校への受験を勧めたり、受験を締めきせたりするのではなく、それぞれが自らの意志で志願した学校に合格できるような適切な指導・助言を行なうのが本来あるべき進路指導である。

(4) 生徒の主体的な選択決定を援助する指導への転換

生徒が、進路希望校の選択を含め、将来の生き方を自己の意志で選択し、自分自身で責任を負うことができるよう指導・援助すること。

進路指導の成果を評価する一つの基準は、生徒がその進路先において十分適応しているかどうかといった点にある。生徒は、自分の意志で自分の進路を選択することにより、自分の進路に責任を負い、進路先でよりよく適応することができる。そして、そのために求められる意思決定の能力は、生徒が、自分なりの生き方を求めていく、将来への夢や希望を実現するための進路計画を立案することや、その計画を実現するいくつかの選択肢の中から、自分なりの選択の基準をもち、一つの選択肢を選択することを通じて、選ばれるものである。

(出所) この資料は、筆者が作成委員長として作成した福岡県教育委員会「進路指導の手引」より掲載したものである。

切に期待するところである。

（３） 大学生の進路意識と職業選択の要因傾向

①若年層の就業に関する現状

わが国における若年層の就職難は、深刻さを増している。この背景には、不景気のみならず、我国の雇用の現状が大きく影響している。パートタイム労働者（正社員以外の労働者で、1週間の所定労働時間が正社員より短い者）の実態がある。2004年厚生労働省の就業形態の多様化に関する総合実態調査によると、正社員65.4%、パートタイム労働者23.0%で、その他（契約社員2.3%、派遣労働者2.0%、出向社員1.5%、嘱託社員1.4%、臨時的雇用者0.8%、他3.4%）となっている。「非正社員比率は、2004年で、男性が14.2%、女性が41.7%と、資料9に示される如く、オランダ、英国と並んで高くなっていて、特に、週35時間未満の労働者では70%が女性である。」⁽¹⁴⁾

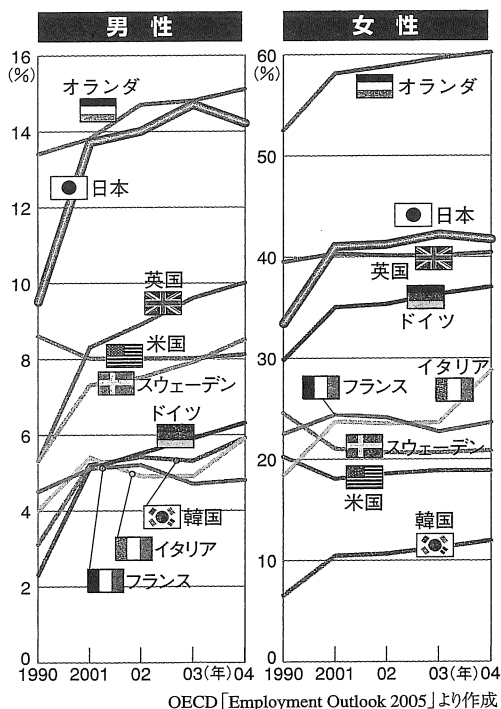
また、「来春卒業予定の大学生の10月1日時点での就職内定率が、前年度同期を4.5ポイント上回る65.8%だったことが厚生労働省、文部科学省の集計で分かった。両省は「2007年度から始まる団塊世代の大量退職と、景気回復が相まって大企業から中小まで採用意欲が強くなっていると分析」⁽¹⁵⁾しているが極めて深刻な事態と言わざるを得ない。

さらに、深刻な事態がある。「今年の労働経済白書によると、15歳から34歳までの年齢層で、アルバイトなどで生計をたてる「フリーター」は、2004年に全国で213万人を数えた。そして職につかず、就学もせず、家事もせず、求職活動もしない通称「ニート」と呼ばれる若年無業者も64万人いる。将来を担う若者が、長期的に能力を高めていくために安定した職場を得られないのは、地域にとって大きな損失である。対策の第1歩は、本人にもう一度「自分に合った仕事を探そう」と思わせる家庭の役割、社会の側からの積極的な働きかけが必要」と社説「若者の就業対策」⁽¹⁶⁾でのべている。

②大学生の進路意識と進路選択

パーソンズモデル（Parsons's Model）では、「賢明な職業選択には、3つの

資料(9) 主要国のパートタイム労働者の比率



(出所) この資料は、「西日本新聞」2005年11月19日付のものを掲載している。

一般的要素がある。それは、①自分自身と自分の適性、能力、興味、志望、資源、限界とそれらの要因についての明確な理解。②成功、有利不利、報酬、機会についての必要資格、条件の知識と各種の仕事のなかでの予測。③以上2つの事実に関する合理的推論である(1909年)。Parsons, Fのこの考え方は、1994年、特性＝因子理論 Trait & Faotor Theory として体系化される。」⁽¹⁷⁾

この理論に端を発し、Ginzberg, E. Super, D. E による、人間の職業的行動を短期的現象としてとらず、生涯発達心理学の視点で個人の生涯にわたる長期的、連続的過程としてとらえた「職業的発達理論」⁽¹⁸⁾が提唱されるなど先駆的研究がなされた。

特に、Super 博士の来日（1990年7月）を機に職業指導から、進路指導の概念へ移行されるに至った。

こうした職業指導から、進路指導への移行は、学校現場に大きな影響を与えた。同時に、青年期の進路発達に関する研究とあわせて、進路指導には、長い生涯的な生き方の視点での指導が指摘されてきた。進路指導関係者の努力にもかかわらず、前項までのべてきたように、偏差値や入学可能性などの成績要因によるものが大きく、適正な進路指導がのぞまれる。

さて、大学生の就業にまつわる問題に触れてみよう。Super, D. E は、職業的人生段階と呼ぶにふさわしい人間の、全生涯にわたる発達段階「①成長段階 Growth Stage（誕生～14歳）、②探索段階 Exploration Stage（15～24歳）、③確立段階 Establishment Stage（25～44歳）、④維持段階 Maintenance, Stage（45～64歳）、⑤下降段階 Decline Stage（65歳以降）」⁽¹⁹⁾を提唱している。東清和・安達智子「大学生の職業意識の発達」で、次の点を指摘している。「大学は、学問を修めるといふ本来的機能の他に、望ましい職業人として社会に参入するための準備を整えるという機能も果している。大学生は、職業的発達プロセス（スーパー、1960）の探索段階後期にあることから、大学生活のなかでさまざまな探索を行って自己の興味や適性を理解し、それらが存分に発揮されるような職業選択へつなげることが望ましい。ところが今の時代、就職協定の廃止やインターネットの普及、そして雇用形態の多様化など、大学生を取り巻く就職状況は刻々と変化し、職業決定を複雑で困難なものにしている。そうしたなか、いかに生き、働くべきかの見通しがもてず選択に取り組めないという問題が深刻化している。」⁽²⁰⁾と現状を分析している。

③大学生の進路選択要因の傾向

大学生の進路決定・未決定を規定する職業への準備的状态ともいえる進路成熟の実態を明らかにする実証的研究がある。

早稲田大学教授 東清和 同大講師 安達智子氏の研究で、資料(10)がその調査結果である。調査は、東京都内の私立大学生216名を対象にしたもので、197名を有効回答、内訳は、1年生63名、2年生10名、3年生54名、4

資料(10) 大学生を対象とした職業に対する意識・態度の調査

表 1 第Ⅰ因子「自己実現の態度」					
	全体	男子	女子	1～2年	3～5年
問 1 私は、生きがいのある生活を送りたいと思う	4.52	4.52	4.53	4.53	4.52
問 4 私は、自分の力で、自立した生き方をしたいと思う	4.16	4.25	4.05	4.14	4.19
問 7 私は、自分のいろいろな態度を十分に生かしたいと思う	4.05	4.02	4.08	4.05	4.05
問 10 私は、自分の人生をもっとすばらしいものにしたいと思う	4.15	4.13	4.17	4.14	4.15
問 13 私は、自分が本当に満足できる仕事につきたいと思う	4.39	4.45	4.31	4.44	4.36
問 16 私は、自分の得意なことはもっと伸ばしたいと思う	4.44	4.18	4.76	4.27	4.54
問 19 私は、人間的に成長したいと思う	4.71	4.36	5.14	5.10	4.48
問 22 私は、自分の仕事や職業を通じて、多くの人々に認められたいと思う	3.75	3.81	3.67	3.79	3.74
問 25 私は、世の中や社会のために役立つ人間になりたいと思う	3.65	3.62	3.70	3.42	3.78
問 28 私は、自分の仕事や職業を通して価値のあることをやりとげたいと思う	3.98	4.06	3.89	3.79	4.10
尺度得点	41.80	41.41	42.29	41.68	41.91
表 2 第Ⅱ因子「進路計画」					
	全体	男子	女子	1～2年	3～5年
問 2 私は、自分の将来について、いろいろな計画を立てている	3.22	3.15	3.30	3.08	3.31
問 5 私は、将来の計画をしっかりと立てている	2.73	2.72	2.74	2.66	2.77
問 8 私は、希望する職業に就くために、特別な勉強や準備をしている	2.82	2.84	2.80	2.67	2.92
問 11 私は、はっきりとした将来の目標を持っている	3.13	3.18	3.07	3.07	3.18
問 14 私は、将来就きたい仕事や自分が自分に向いているかどうか検討している	3.32	3.35	3.29	3.19	3.40
問 17 私は、将来の仕事や職業について、いろいろと考えている	3.79	3.69	3.91	3.68	3.86
問 20 私は、将来就きたいと思っている仕事の内容をよく理解している	3.79	2.74	2.84	2.55	2.93
問 23 私は、自分がどんな仕事をしたいのか、よく考えている	3.55	3.46	3.66	3.41	3.64
問 26 私は、自分が本当にやってみたい仕事は何なのか、よくわかっている	2.89	2.87	2.92	2.71	3.01
問 29 私は、自分に合った生き方を見つけている	2.94	3.01	2.86	2.88	3.01
尺度得点	31.19	31.04	31.38	29.91	32.02
表 3 第Ⅲ因子「進路決定」					
	全体	男子	女子	1～2年	3～5年
問 3 私は、これから先の進路をまだ決めていない	3.39	3.43	3.34	3.23	3.50
問 6 私は、これからの進路について、よく考えている	3.38	3.35	3.40	3.10	3.54
問 9 私は、どんな生き方がよいのか、よくわからない	3.19	3.26	3.09	3.25	3.16
問 12 私は、自分がこれからどのように生きていくのか、よくわからない	3.05	3.09	3.00	3.11	3.02
問 15 私は、自分のこれからの進路を、自分で決めていく自信がある	3.44	3.59	3.24	3.44	3.46
問 18 私は、こういう仕事をしたいという希望を持っている	3.84	3.85	3.83	3.84	3.86
問 21 私は、自分の将来の生き方について、よく考えている	3.51	3.46	3.57	3.51	3.52
問 24 私は、どんな仕事に就くかは、その時になって決めればよいと思う	3.69	3.67	3.70	3.73	3.66
問 27 私は、これからの進路について、今はまだ考えたくない	3.82	3.85	3.77	3.73	3.85
問 30 私は、自分の将来の仕事や職業を決めることに、不安を感じていない	2.51	2.68	2.30	2.38	2.60
尺度得点	33.81	34.25	33.25	33.32	34.18

(出所) この資料は、東清和 安達智子「大学生の職業意識の発達」学文社127-129ページから掲載したものである。

年生65名、5年生5名、男女別には、男子110名、女子87名で、項目別回答は、非常によくあてはまる（5点）から、ほとんどあてはまらない（1点）の5段階評定の質問紙法によるものである。

この資料の表1「自己実現的態度」では、10項目構成で、男子41.41、女子42.29と女子が高い。特に、女子の「項目16 自分の得意なことを伸ばしたい」「項目19 人間的に成長したい」が高い。これに対して、男子の方が、「項目28 自分の仕事や職業を通して価値あることをやりとげたい」が高い。

表2 進路計画は、将来の職業場面向けて現時点で実用的な活動をどの程度行っているかの10項目構成で性差はなく、3～5年生が将来に向けて進路計画を着実にすすめている。

項目8「希望する職業に就くために、特別な勉強や準備をしている」「項目14 将来就きたいと思っている仕事の内容をよく理解している」に3～5年生に高い。

表3「進路決定は、将来どのような職業に就きたいかの意志決定の強さに関するものを尺度得点でみると、男子に高い。「項目30 自分の将来の仕事を決めることに不安を感じていない（男子2.68女子は2.30である）」特に、3～5年生で高いのは、「項目30自分の将来の仕事や職業を決めることに不安を感じていない（1～2年2.38、3～5年2.60）」である。自己の進路選択が迫られているにもかかわらず、こうした意識は、自分の適性把握、働くことに対する勤労観、職業観育成の不十分なままの状態で進路決定が余儀なくされ、自己にとって最適な進路選択になっていない一面を指摘せざるを得ない。

この調査結果の総合考察で両者は、次のようにのべている。

「今回のアンケートを実施した大学生には、いわゆる進学校と呼ばれる高校で学び、偏差値を物差しとする受験指導を受けてきた者が多く含まれるが、そうした偏差値による輪切りの指導が、今回の結果にも影響しているのではなかろうか。つまり、偏差値という相対的なものを頼りに自らの進路を決定してきた若者たちにとって、自分自身が一体何であるのか、自分は何をした

いのか、どのような適性があるのかということが明確になっていない。」また、「進学指導に絶対の影響をもつ偏差値の高い者たちは、そうした不安定な自己概念とは裏腹に、職業社会においても偏差値により決定された学校歴が、影響力を及ぼすという幻想をもっているのかもしれない。そうした幻想が、将来何らかのかたちで自己実現したいという漠然としたイメージを増幅させるのだろう。このような若者の増加は、早期離職率の上昇や離転職を繰り返すフリーターの増加といった現象にも反映されている。」⁽²¹⁾

両者も言うように、成績や偏差値の合格の可能性のみによる指導を受けてきた若者たちにとって、人生について長期的展望をもち、自らの生き方を決定することは、これまでに経験したことのない困難な問題である。

ここに、これまでの進路指導の在り方を省きみると同時に、大学における職業意識の育成を含めた教育の在り方が問われる。

以上、のべてきた、大学生を対象とした早期からの、職業や自己の興味・能力・適性等の十分なる吟味に立脚しての将来の展望ができる者に育成できるような教育的指導が急務である。このことについては、次回にまわすことにし、本稿のねらいにある、キャリア教育の在り方についてのべることにする。

2. キャリア教育の在り方

(1) 「職業指導期」から「進路指導期」さらに「キャリア教育期」へ

職業指導のシンボルと見なされる、パーソンズ Parsons, F は、1908（明治41）年にボストンの市民厚生館に職業指導局を開設し、1909年刊行の「職業の選択」は、職業指導に関する世界初の書であり、モデルを発表している。

このモデルは、「賢明な職業選択には3つの一般的要素がある。それは、①自分自身と自分の適性、能力、興味、志望、資源、限界とそれらの要因についての明確な理解。②成功、有利不利、報酬、機会についての必要条件の知識と各種の仕事のなかでの予測。③以上2つの要因間の関係の合理的推論である。」⁽²²⁾これは、1940年、特性・因子理論 Trait & Factor Theory として体

資料(11) 職業的発達に関する12命題（日本職業指導協会、1962）

- 第1命題；キャリア発達は、つねに前進する、継続的な、そして一般には再びもとはにもどることのできない過程である。
- 第2命題；キャリア発達は、秩序あるひとつの型をもった予測できる過程である。
- 第3命題；キャリア発達は、ダイナミックな過程である。
- 第4命題；自我概念は、青年期以前に形成しはじめ、青年期において次第に明確になり、職業的なことばに置きかえられる。
- 第5命題；現実的要因は、青年前期から成人へと年齢が増すに従って、職業選択上ますます重要な役割を占めるようになる。
- 第6命題；親あるいはそれに代るべき者との同一視は、その年に応じた適当な役割の成長と関連をもち、一貫した調和ある人間関係と関連をもち、また職業的計画ならびにその結果という立場からの彼らの解釈にも関連をもつ。
- 第7命題；ひとつの職業水準から他の職業水準への上下移動の方向と比率は (1)知能 (2)両親の社会経済的水準 (3)地位上の欲求 (4)価値観 (5)興味 (6)人間関係の技量 (7)労働力の需給、などに関連をもつ。
- 第8命題；個人が入る職業分野は、次のことに関連をもつ。(1)興味 (2)価値観 (3)欲求 (4)役割モデルと同一視のしかた (5)資源 (6)学歴 (7)地域社会の職業構成・職業動向及びその態度。
- 第9命題；それぞれの職業には弾力性がある、同一の職業でもいろいろな人が従事できるし、ひとりの人が違った職業に従事できる。
- 第10命題；仕事からうける満足感と生活上の満足は、個人が自分の能力・興味・価値観・パーソナリティ特質にたいするはけ口を、仕事のなかに見いだす程度によってきまる。
- 第11命題；個人が自分の仕事から到達する満足度は、彼自身が自我概念をどれほど実現できたかの程度に比例する。
- 第12命題；仕事あるいは職業は、大多数の男子・女子にたいして、パーソナリティ構造上の焦点となる。

（出所）この資料は、「進路指導の理論と実践」小竹正美・山口政志・吉田辰雄 日本文化科学社2000年31ページから掲載。

系化される。

1913（大正2）年、全米職業指導協会（NVGA）が結成されている。

日本では、1927（昭和2）年文部省訓令「児童生徒、個性尊重及職業指導ニ関スル件」で通達、職業指導を正式に学校教育に導入した。以来、1957（昭和32）年11月の中央教育審議会の答申のなかで、「職業指導」に代えて、「進路指導」の用語を公式文書として使用する⁽²³⁾まで職業指導期は、30年余を経過している。

1960（昭和35）年、高等学校においては、ホームルームが進路指導の場であることが明確にされ、1960年、日本職業指導協会、職業指導セミナー東京大会に D. E. Super（1957年に職業的発達に関する12命題－資料(11)を発表

し、その実証のための長期にわたる進路経歴の類型的研究 Career Pattern Study を発表し、人間の全生涯にわたる職業的発達課題を提唱）を招いたのを機に、発達心理学の適用をふまえた進路指導の実践研究が盛んになった。また、1967（昭和42）年ミネソタ州における職業教育・職業指導の先行研究で、ミネソタキャリア発達のカリキュラム（ミネソタプラン）が紹介されるなど、キャリア教育の胎動ともいえる時期を迎えるのである。

特に、1981（昭和56）年中央教育審議会答申、進路指導の充実で「進路指導については、近年、受験戦争が激しくなり、その指導はややもすると進学指導に重きを置かれがちである。

中学校や高等学校においては、生徒が正しい勤労観や職業観を身につけ、将来社会人としてあるいは職業人として、より良い生き方を見だし、自らその進路を選択することができるようにすることが重要である。さらに、学校や父母に対しても、進学上、職業上の広い知識・情報が与えられるようにするとともに、進路指導に関し、学校、家庭、社会の間の連携・協力を一層強化することが大切である。また、このような進路指導の充実と並んで、社会全体が人間の能力をより多面的にとらえ、これを正しく評価するようになることが望まれる⁽²⁴⁾。（一部省略）」とされ、その後、1985（昭和60）年の臨時教育審議会第一次答申はじめ、第四次答申など、いわば教育改革が行われる。

1988（昭和63）年の第5回小中学校学習指導要領改訂で特に、在り方・生き方の指導としての進路指導が重視されるに至る。以来1999（平成11）年の中央教育審議会答申をきっかけにキャリア教育期を迎えるまで進路指導期は、42年余を経過している。

さて、今、迎えているキャリア教育は、1990（平成2）年、Donald. E. Super 博士の日本大学での特別講演「キャリア発達理論の適用」が、我が国の進路指導研究のみならず、カウンセリング、教育臨床の研究にも大きな示唆をうけたことに端を発している。

平成11年12月、中央教育審議会答申「望ましい職業観・勤労観及び職業に

関する知識や技術を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」として、小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を実施する必要を提言していることを特記したい。

最後に、2005（平成17）年10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する⁽²⁵⁾」中での学習指導要領の見直し点をあげる。

- ①将来の職業や生活の見通しを与えるなど、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる教育を充実し、学ぶ意欲を高めること。
- ②小・中・高校の各学校段階を通じて、自然体験、職場体験、就労体験、奉仕体験などの体験活動を計画的・体系的に推進する必要があること。
- ③ニートやフリーターの問題も指摘されるなかで、キャリア教育の推進が強く求められていることなどである。

今後の日本の教育をどう構築していくかを考える上で、一つの重要な視点として「キャリア教育」をあげているのである。

（２） キャリア教育の在り方

1994（平成6）年より3ヶ年間の文部省「中・高連携進路指導総合改善推進事業、福岡県同事業研究・委嘱を受けてのキャリア教育実践がある。

筆者（当時、天拝中学校長）は、Parsons, Fの特性・因子理論等職業選択理論等、D. E. Superの職業的発達理論やミネソタプラン（発達課題）等及び日本の研究者の理論に触れ実践してきたことに加えて標記の研究指定委嘱校としての任務に恵まれた。1999（平成11）年のキャリア教育提言前に先導的試行の立場からの「中・高連携研究」に取り組んだもので、3ヶ年間の、研究実践について、反省・検討を加えながら、キャリア教育の在り方を論述したい。

- ◆ 研究実践から、キャリア教育の在り方を求める。

資料(12)

研究主題「生徒の主体的な進路選択力を高める進路指導」(筑紫野市立天拝中学校)⁽²⁶⁾

〈主題の意味〉

主体的な進路選択力とは、

一人ひとりの生徒が自ら自己を深く見つめ、自分のよさや適性を発見し吟味し、進路に関する知識・情報を選択活用でき、自分の将来の夢や希望を大切にしたい進路計画に基づいて自己をどう生かしていきたいかを考え、自らの意志と責任で進路を決定することができる能力と態度のことである。

そこで、具体的な進路選択力としては次の4つを掲げ、培うことにした。

- | | | |
|-----|----------|---|
| I | 自己理解力 | 自己の能力や適性を理解できる能力と態度 |
| II | 情報収集・活用力 | 進路情報を意欲的に収集できる能力と態度
上級学校・職業の種類や内容を理解できる能力と態度
身の回りの情報を活用できる能力と態度 |
| III | 進路計画力 | 将来に夢や希望を持ち、将来の進路計画や具体的な努力目標を設定できる能力と態度 |
| IV | 進路決定力 | 自己と進路の関係を考え、自分の意志で進路を決定できる能力と態度 |

研究にあたっての基本的な考え方と目標

(1) 研究にあたっての基本的な考え方

進路指導研究の動向の中で実効があったとされるキャリア教育の立場に立脚した進路発達課題をふまえ、主題研究に取り組むことにした。

進路発達課題 (ミネソタ・プラン)

幼稚園～小3	小4～小6	中1～中3	高1～高3	高校卒業後
1. 自己について知覚する。 2. 働く意味を把握する。 3. 働く人に対して同一視する。 4. 働く人々についての知識をうる。 5. 人間関係の技術を身につける。 6. 自己の客観化ができる。 7. 他人やその仕事に対する畏敬の念を深める。	1. 自己概念を発展する。 2. 働く習慣を身につける。 3. 仕事の概念を明らかにする。 4. 働く人々についての知識を深める。 5. 人間関係の技術をたしかめる。 6. 自己の客観化を拡大する。 7. 人間性を尊重する。	1. 自己概念を明確化する。 2. 職業計画(進路計画)。 3. 暫定的な人生計画(進路計画)を立てる。 4. 職業と仕事場面についての知識・理解をうる。 5. 教育的・職業的情報についての知識をうる。 6. 意志決定プロセスを自覚する。 7. 自立の精神を身につける。	1. 自己概念を現実的に吟味する。 2. 好ましいライフスタイルを自覚する。 3. 進路計画を再検討する。 4. 職業と仕事場面についての知識と経験を深める。 5. 教育的・職業的進路についての知識を深める。 6. 自己の意志決定プロセスを明確にする。 7. 変化する社会のなかで進路計画の実現に努める。	1. 明確化した自己を再評価する。 2. 希望の職業と選択したライフスタイルを探索する。 3. 進路情報を探索し情報処理スキルを獲得する。 4. 職場組織に関する能力と対人技能を伸長する。 5. 後続の課題に対する試行的コミットメントを深める。 6. 自己と社会の変化に対処するため責任ある自立性と技能を身につける。 7. 人生上の役割操作技能とその応用力を創造する。

進路発達過程（文部省 進路指導の手引き－啓発的経験編）

過程 学校	進路発達 目 標	進路発達課題（例）	
小 学 校	自己と進路の理解	1 自己像の形成と発展 2 勤労習慣の習得 3 職業概念の理解 4 職業人モデルへの同一視	5 人間関係技能の習得 6 自己の客観化の拡大 7 人間性の尊重
中 学 校	進路の探索と選択	1 自己理解の明確化 2 人生設計立案責任の受容 3 暫定的進路計画の立案 4 啓発的経験の獲得	5 教育・職業情報の収集・検討 6 進路選択過程の理解 7 自立の精神の確立
高等学校	進路の吟味と決定	1 自己理解の現実吟味 2 好ましい生き方の自覚 3 進路計画の再検討 4 啓発的経験の深化	5 教育・職業情報の選択的活用 6 進路の決定と過程の一般化 7 自己実現の能力・態度の確立

本校では、キャリア教育を次のようにとらえている。

キャリアとは、生徒一人ひとりが生涯を通して携わる仕事の全体を指し、教育とは、生徒が学習を通して獲得する経験の全体である。

キャリア教育とは、生徒が人間としての生き方の一側面として、中学校卒業後あるいは、近い将来迎えるであろう働く職業の世界の動きや職業、上級学校やその他の教育施設について学び、自己理解を深め、啓発的経験を通して、自己にとって最も満足できる進路を主体的に選択決定し、その後の生涯進路の中で望ましい職業的・社会的自己実現ができるのに必要な関心・意欲、知識、技能、態度、価値観等を伸長するはたらき（進路指導＝Career-Guidance）である。

本校は、実効があったとされるキャリア教育学校モデル（児童・生徒のキャリア発達を中心に教育計画を再構築する。職業観、自己理解、進路選択、自己実現力を育成する。）、文部省手引きの進路発達過程における中学校段階の進路発達目標「進路の探索と選択」等の発達課題をふまえ、学習指導要領で示す「生徒が自らの在り方、生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路選択力の育成に取り組むことにした。

（２）研究の目標

- ①生徒一人ひとりが、自分の良さや可能性をとらえ、進路目標の達成に向けて主体的、実践的に活動し、進路実現ができる生徒を育成する学級活動の在り方を研究する。
- ②生徒一人ひとりが、夢や希望を大切にし、将来の生き方を考え、主体的に進路選択・決定できる指導・援助の在り方を研究する。
- ③中・高連携した進路指導の在り方とその方策の研究をする。

〈主体的な進路選択力を身につけさせるための生徒像〉

主体的な進路選択力	I 自己理解力	1 進路への興味・関心をもつことができる生徒 2 自分の能力・適性を発見し伸ばそうとすることができる生徒 3 仲間の良さを見つめることができる生徒
	II 情報収集活用能力	1 情報を意欲的に収集できる生徒 2 情報内容を理解できる生徒 3 進路情報を活用できる生徒
	III 進路計画力	1 将来の夢・希望（肯定的イメージ）をもつことができる生徒 2 生き方を探求できる生徒 3 進路計画を立案できる生徒 4 具体的な努力目標を設けることができる生徒
	IV 進路決定力	1 選択した進路を多面的・総合的に吟味できる生徒 2 自分の意志で決定できる生徒 3 希望進路の実現に向けて努力できる生徒

（3）研究の構想

社会の新たな変化や課題に適切に対処できるため、主体的に変化に対応できる能力として困難に立ち向かう強い意志、問題解決に積極的に挑む探究心、生き方への探索、主体的に目標を設定し、必要な知識・情報を選択活用していく能力、自己を見つめ、良さ・適性を伸長してよりよい進路選択ができる能力等が重要である。

「自ら考え、正しく判断できる児童・生徒の能力」の言い方を時代の要請に合わせて表現される、自己教育力、即ち①学習への意欲 ②学習の仕方の習得 ③生き方の探索を本校研究の基本的な構えとして、今回の第15期中教審の第1次答申にも出された同意味の「生きる力」を生き方の形成として大きな柱にすえ、特に、主題に示す主体的な選択力の育成を図ろうとするものである。

—— 学習、進路（生き方）への意欲 ——

学習、進路（生き方）への興味・関心を高め、やりたい、成し遂げたい、なりたい意欲を喚起させたい、興味とは、生徒にとって、対象や行動が意味のある価値あるものと感じる状態で、対象や行動へと積極的に選択的注意を向けようとして働く構えで、関心は、興味・注意を向けることによって、ある方向に行動を誘発しようとする力ととらえている。

—— 学習意欲の要因 ——

1. 夢・自己を高めたい目標…なりたい、やりたい思いが学びの姿勢をよくする。
2. 生活習慣…学校の中だけではとらえにくい、学習意欲形成の上で大きな要因となる。
3. 情緒的安定…教師と生徒、生徒同志の関係が強圧的なクラスでは萎縮しがちである。
4. 人間関係…人間関係の調整がはかれていること。
5. 学習の基本的習慣…学校生活において、基本的な生活習慣が体系付けられていること。
6. 学習に対する興味…学習状況のいかんにより、興味の示され方はちがってくる。
7. 学習技能…学ぶための力がつけば、意欲は高まるはずである。
8. 学習内容・方法…学習の中身が充実し、学習方法がきちんとしていることが大切である。
9. 性格傾向…性格傾向によって意欲の内容が違ってくる。
10. 学力水準…わかる喜び、やり遂げた喜びが、意欲につながる。

ひとり学び（学習の仕方）

社会の変化を考え、現在、将来の日常生活や職業生活において必要な能力として「学習の仕方」を身につけさせることが大切である。

自ら学んでいくためには、自分から頑張って取り組んでいこう、といった気持ちを生み出させる（好奇心、効力感を持たせる）、いわゆる内発的動機づけを大切にするレベルからさらに、何故この学習をやらなければならないのか、この学習は、どういう意味で大事なのか、それと同時に、肯定的な自己イメージのもとに「まねび」から、自分なりの考え方に、このような考えややり方があるのか、付加、修正して、自分なりの高まった考え方へと、学びとり方を習得させたい。

教師の支援のもとに、グループで、集団として、あるいは、学級全体で生徒達が考えを出し合い、自分たちの調べたことを話し合い、違う発想、違う納得を相互に出し合い、ひびき合い、質のより高いものにまとめる学び方を大切にし、日頃から経験させておきたい。

生き方の探求

生き方の問題にかかわるものを取り上げ、自らがいかにあるべきか、いきるべきかを考えさせ、生き方を探索できるように努めたい。

自分は、どういう生き方をしたいのか、どういう在り方をしたいのか、自分は、どういう高校生に、大学生に、社会人になっていきたいのか。さらに、トータルとして、自分の一生をどのような形で構築したいのかを肯定的イメージのもとに、夢希望を膨らませて、自分の志向性、進むべき道を少しずつ形成させたい。

＜研究仮説＞

学級活動における進路学習や啓発的体験等、実践的活動の場を生徒行動をもとに取り入れ、主体的に活動できるための手だてを工夫していけば、自己実現に向けて進路の計画をたて、自らの進路を探索することができ、主体的に進路を選択できる力を高めることができるであろう。

＜研究構想＞

（１）学級活動の基本的指導過程の工夫

＜手だて１＞

・「気づく」「考える」「まとめる」の３段階の指導過程の工夫。

自ら考え、判断し、自主的・実践的な活動によって問題解決を図り、望ましい学級生活作りや自分の生活作りができるように、本主題研究では、学習過程の中に特に、自己を素直に見つめ直し、よりよい自分作りの考えを持たせ実践できる（自己指導）面を重視して、その指導にあたりたい。

気づく (自己受容)	課題・課題の共有化、意識化
	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の自分を素直に振り返る ・課題は何か、何がわかればよいか ・一人ひとりが自分の課題としてとらえるか ・解決・手だての必要性に気づく ・どのような方法や資料が必要か
考える (解決、対処の方法を追求) (自己理解) (自己変革)	問題の考察、究明、収集した情報の検討
	<ul style="list-style-type: none"> ・課題・問題を分析し、原因・理由を追求する ・どうすればいいか、自分は何をしたいか、対処のしかたを話し合う ・仲間相互に考えを出し合い、付加・修正する ・今後の対処の仕方を決定し、まとめる
まとめる (自己指導)	実践への意欲化
	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の実践のしかたや進む方向を各自が確認する ・自分はどう実践すべきか、実践の構えをつくる

〈手だて2〉

- ・生徒が意欲的に取り組む活動のあり方

生徒の意欲的な活動を高める方法として、次の両面が大切である。本主題研究では、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力育成にかかわるものであるもので、両側面の関連を図りながら実践していく。

(個の自主的・実践的な活動を助長させるために)

自己の意志決定 → 自己指導 → 個人の健全な生活態度

(集団の自発的、自治的な活動を助長させるために)

集団の意志決定 → 協同実践 → 集団生活の充実と向上

〈手だて3〉

- ・生徒の意欲を高め、実践力を高める啓発的経験活動の導入

自己を素直に見つめ、見直し、自己指導ができるためには、当面する問題等に自分で気づきその解決方法や行動等の選択を思考、判断し、それに従って当面する問題を自分の力で解決・解消する体験の場や機会を多くすると共に、教室や学校内に止めず、ねらいや内容に応じてその対象を校外にも求めて、体験的な活動を多くさせることを重視している。

職場見学、職業調べ、上級学校調査をはじめ、職場体験、体験入学、働く人から学ぶ、働く人へのインタビュー等々を取り入れている。生徒のニーズを取り入れ、生徒による企画、実施等の過程や活動の成果を通して、生徒に成就感や充実感を体得させたり、今後生きていく上で心に大きな感動を与えたり、生かしていけるよう配慮したい。

自己評価、相互評価を取り入れ、仲間の良さを認め合い、受容的態度のもとで学習させ、よりよい自分作り、仲間作りのために、次の手だてを講じたい。

For myself カードによる自己分析。
自己診断表による自己分析。

生徒の肯定的イメージを高め、意欲に結びつけていく取り組みとして。

Today's My Goal の取り組みから、生徒の目標達成感を
高揚させ、「やる気」→意欲へと結びつける。

() 月 () 日	
TODAY'S MY GOAL	氏名 ()
今日の私の目標は、	
目標を達成したときの利点	
1	
2	
3	
目標達成できなかったときの不利点	
1	
2	
3	
目標達成の計画	
1	
2	
3	
評 価	
目標を達成できましたか	はい いいえ
それはどうしてですか？	

(資料 3 TODAY'S MY GOAL)

〈手だて 4〉

・学級活動と道徳、教科の関連

進路指導の目標として、学習指導要領（第 1 章総則第 6 ・ 2 ・ (4)）では次のように述べている。

「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校のエデュケーショナル・アクティビティ全体を通じ、計画的、組織的な指導を行うこと」という考えを踏まえ、本校では学級活動と道徳、各教科の有機的な関連を図り、計画的・系統的に進路指導が実践できるようにするため、以下の手だてを講ずる。

- ①人間としての生き方の視点に立って、個々の変容をめざすように、道徳の価値の分析や資料の精選を行い、学級活動との関連を図った指導計画を作成し、指導に役立てる。

②各教科の指導においては、個性を生かして主体的に進路を選択できるように、教科の特性、指導方法の工夫などを検討し、学級活動・道徳・教科との関連表や各教科における「主体的な進路選択力」のとらえ方などの一覧表を作成して、指導に役立てる。

〈手だて5〉

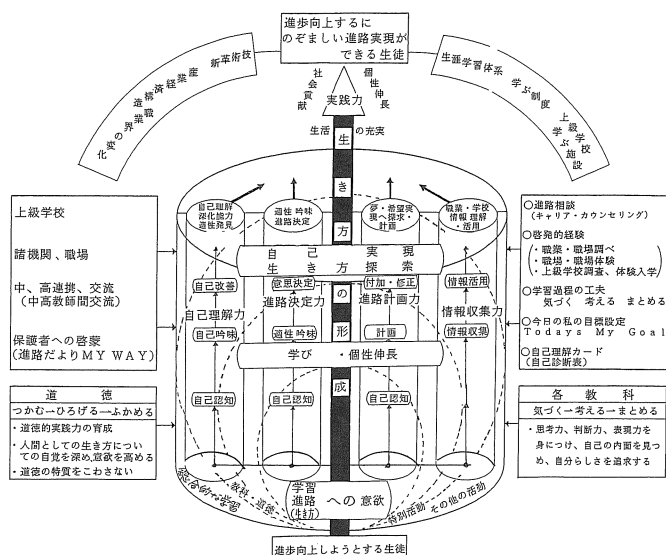
・自己を見つめさせたり、自己の不安・悩みを解消させたり、肯定的イメージを膨らませたり、自己伸長させるための心温かいキャリア・カウンセリングの導入。

主題研究では、特に進路に関する悩みや問題の解決を図らせ、生き方の支援、人生設計の支援等の他、ニーズに答えて資料等の紹介に、生徒の意志決定、自己指導に役立つ支援をする。

〈職員の共通理解と各研究部〉

・研究推進に向けた職員の共通理解

- (1) 校長を中心とした、全職員による研究推進を目指す。
- (2) 全員による授業公開を実施し、指導力量の向上を目指す。
- (3) キャリア・カウンセリングの考え方を研究し、教育実践に生かしていく。
- (4) 研修会、研究発表会に積極的に参加し、研究を深めていく。
- (5) 中・高連携を基盤とした進路指導の在り方の研究を深めていく。
- (6) 開かれた学校作りのために、家庭・地域との連携・協力を図っていく。
- (7) 3研究部会による研究実践を進める。(授業研究部会、啓発研究部会、相談研究部会)



(出所) 上記資料は、筆者が福岡県筑紫野市立天拝中学校長として、文部省、中・高連携総合推進事業調査研究協力校研究・委嘱を受けての研究報告書「研究紀要」1996年10・25ページから掲載したものである。

上記の実践例は、キャリア教育の先行的試行の段階のもので、キャリア教育への志向及び充実に生かされるものとして、関係者の評価を得た。今、キャリア教育が、小中高校において関心が高められ、その実践も深められている折、実践者だった筆者が、反省・検討を加えて、キャリア教育の推進に参考にしていただきたいと願うものである。

◆ キャリア教育の視点

〈視点1〉キャリア教育にあたっての研究構想について

キャリア教育推進にあたり関係者に関心をよせたものに、資料(13)に示す「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み⁽²⁷⁾ (例)～職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成の視点から」国立教育政策研究所調査研究報告書(2002年)がある。

この報告書は、職業的(進路)発達課題(小～高等学校段階)各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という立場から捉えたもので意義深い。天拝中学校の研究は構想図にあるように、自己認知、自己吟味の、自己理解力、情報収集力・情報活用能力、学習・進路(生き方)への意欲を基盤にしての、自己認知、適性吟味そして意志決定ができる進路決定能力の育成を大きな柱としてあげている。また、将来の設計能力である自己認知そして、自己実現へ向けて、進路情報等に照らして生き方探索させ、生き方の形成を大きな柱にし、進路計画力の育成をねらう。天拝中学校プランは意義深いと関係者から評価を受けた。

資料(13) 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)
～職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成の視点から

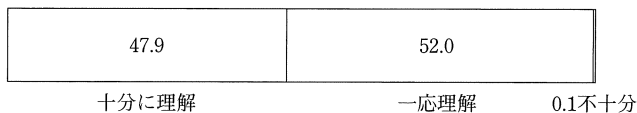
			小 学 校		
			低 学 年	中 学 年	高 学 年
職業的(進路)発達の段階			進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期		
○職業的(進路)発達課題(小・高等学校段階) 各発達段階において達成しておくべき課題を、 進路・職業の選択能力及び将来の職業人として 必要な資質の形成という側面から捉えたもの。			<ul style="list-style-type: none"> ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 		
職業的(進路)発達にかかわる諸能力			職業的(進路)発達を促すた		
領域	領域説明	能力説明			
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲良く遊び、助け合う。 ・お世話になった人などに感謝し親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のよいところを見つける。 ・友達のよいところを認め、励まし合う。 ・自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の長所や欠点に気付く、自分らしさを発揮する。 ・話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつや返事をする。 ・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 ・自分の考えをみんなの前で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ・友達の気持ちや考えを理解しようとする。 ・友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりの気持ちをもち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ・異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
情報活用能力	学ぶこと、働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな職業や生き方があることが分かる。 ・分からないことを、図鑑などで調べたり、質問したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ・自分に必要な情報を探すと。 ・気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・係や当番の活動に取り組む、それらの大切さが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・係や当番活動に積極的にかわかる。 ・働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設・職場見学等を通し、働くことの大切さや苦労が分かる。 ・学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連を考える。
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 ・仕事における役割の関連性や変化に気付く。
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の準備や片づけをする。 ・決められた時間やきまりを守ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や希望を持つ。 ・計画づくりの必要性に気付く、作業の手順が分かる。 ・学習等の計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来のことを考える大切さが分かる。 ・憧れとする職業を持ち、今、しなければならぬことを考える。
意思決定能力	自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組む克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなもの、大切なものを持つ。 ・学校でよいことと悪いことがあることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ・してはいけないことが分かり、自制する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 ・教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことは自分で行おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 ・自分の力で課題を解決しようと努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 ・将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

※ 太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

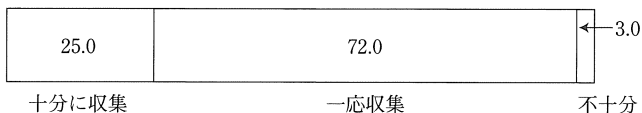
中 学 校	高 等 学 校
現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
<ul style="list-style-type: none"> 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 進路計画の立案と暫定的選択 生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己受容 選択基準としての職業観・勤労観の確立 将来設計の立案と社会的移行の準備 進路の現実吟味と試行的参加
めに育成することが期待される具体的な能力・態度	
<ul style="list-style-type: none"> 自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 自分の悩みを話せる人を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする。 他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 互いに支え合い分り合える友人を得る。
<ul style="list-style-type: none"> 他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 新しい環境や人間関係に適応する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意思等を的確に理解する。 異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に応じた適切なコミュニケーションを図る。 リーダー・フォロアーシップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 新しい環境や人間関係を生かす。
<ul style="list-style-type: none"> 産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。 生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・収集・整理し活用する。 必要に応じ、獲得した情報に創意工夫を加え、提示、発表、発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 就職後の学習の機会や上級学校卒業後の就職に関する情報を探索する。 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続き・方法などが分かる。 調べたことなどを自分の考えを交え、各種メディアを通して発表・発信する。
<ul style="list-style-type: none"> 将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> 就業等の社会参加や上級学校での学習等に関する探索的・試行的な体験に取り組む。 社会規範やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し、習得する。 多様な職業観・勤労観を理解し、職業・勤労に対する理解・認識を深める。
<ul style="list-style-type: none"> 自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 ライフステージに応じた個人的・社会的役割や責任を理解する。 将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する。
<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。 将来の進路希望に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生きがい・やりがいがあり自己を生かせる生き方や進路を現実的に考える。 職業についての総合的・現実的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案する。 将来設計、進路計画の見直し再検討を行い、その実現に取り組む。
<ul style="list-style-type: none"> 自己の個性や興味・関心等に基づいて、よりよい選択をしようとする。 選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任が伴うことなどを理解する。 教師や保護者と相談しながら、当面の進路を選択し、その結果を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 選択の基準となる自分なりの価値観、職業観・勤労観を持つ。 多様な選択肢の中から、自己の意思と責任で当面の進路や学習を主体的に選択する。 進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、実現可能性について検討する。 選択結果を受容し、決定に伴う責任を果たす。
<ul style="list-style-type: none"> 学習や進路選択の過程を振り返り、次の選択場面に生かす。 よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来設計、進路希望の実現を目指して、課題を設定し、その解決に取り組む。 自分を生かす役割を果たしていく上での様々な課題とその解決策について検討する。 理想と現実との葛藤経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身につける。

(出所) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書)』2002

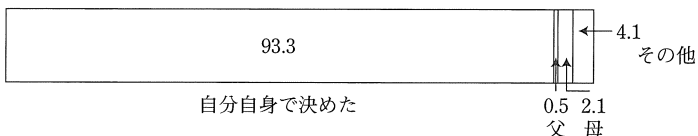
〔検証〕・「自分自身について、どの程度理解しましたか。」



・「あなたは、進路選択に向けて進路に関する情報をどの程度収集できましたか。」



・「あなたの進路は、誰が決めましたか。」



(出所) 天拝中研究紀要より掲載調査対象 3年生 194名 (1996年12月)

〔改善点〕

・資料(国立教育政策研究所)職業的(進路)発達にかかわる諸能力では、「他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、さまざまな人とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む人間関係形成能力」をあげている。

また、東京大学大学院教育学研究科教授 市川伸一氏は、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力を人間力と定義して知的能力の要素、社会・対人関係力要素、自己制御的要素を総合的にバランス良く高めることが人間力を高めることと言えよう。」⁽²⁸⁾とのべている。

この2つの考えを研究構想の面に出し、教育研究・実践に取り入れ検証することが大切である。

資料(13) ミネソタプラン理論モデルとその枠組み

10の枠組みは次のようである。

- ① 職業的役割に関する興味・能力・価値・性格を明確化する。
 - ② 職業領域と就業機会、可能な満足感、要求される働き手の役割、その他の次元を探索する。
 - ③ 人間の生活経験の中での仕事の意味と価値を理解する。
 - ④ 現代の世界における仕事の仕組みと構造を理解する。
 - ⑤ 仕事の中での個人的役割と地域社会の福祉との関係を理解する。
 - ⑥ 職業目標と目標実現のための計画を樹立する。
 - ⑦ 仕事の中で、生産的人間として、自己概念を獲得できるということを、職業行動を通じて表現する。
 - ⑧ 基礎的技能・生活維持技能・対人的技能と、大人になって志望を達成できる仕事との関係を理解する。
 - ⑨ 基礎的技能と知識、仕事や職業に関する行動性格を所有していることを表現する。
 - ⑩ 職業行動を通じて、学習・適応・選択した職業における成長・発達の能力を教師の指導・助言によって、生徒自らが示す。
- 枠組みの①～⑦までは、方向づけや探索を行う指標であるし、⑧～⑩までは、教育・訓練によって具現されるべき指標となる。

(出所) この資料は、仙崎武「進路指導革新の動向と課題日本職業指導協会1973年26-28ページより掲載。

〈視点2〉キャリア教育にあたり、ミネソタプラン（理論モデルとその枠組み）について再考する。

ミネソタプランは、「Careerの発達とは、教育と職業の世界の中で、選択したり、従事したりする中でみられる自己の発達である」立場から、次の10の枠組み⁽²⁹⁾を立て、小・中・高一貫した進路の教育プランを、児童・生徒の到達すべき行動目標として作成している。

この行動目標は、小・中・高を通じてのシーケンス（体系）を、各学校レベルのスコープ（範囲）をあらわしており、児童・生徒の職業的発達段階を基礎に、らせん的・立体的に構成されている。

○この行動目標は、小・中・高連携した研究に多くの示唆を与える。天拝中学校での筆者らの、中・高校連携研究実践に資料(12)（進路発達課題—幼稚園～小3から高校卒業後までの行動目標）とともに、大いに参考にしたところである。

〈視点3〉キャリア教育は、特別の時間、特定の教師による教育でなく、小・中・高連携のもとに、児童・生徒の職業的（進路）発達課題に即した、全教育活動を通して行われるものである。

〔試行例〕

- (1) 学級活動における、学級集団全生徒を対象にした、指導題材系統を図示したのが、資料(14)である。
- (2) 資料(15)は、学級活動・道徳・教科における進路題材系統・関連表（一部省略）の例である。
- (3) さらに、天拝中学校では、国語科から英語科・教科、道徳等に「自己理解力」、「情報収集・活用力」、「進路決定力」の行動目標（省略）がかかげられている点が評価された。

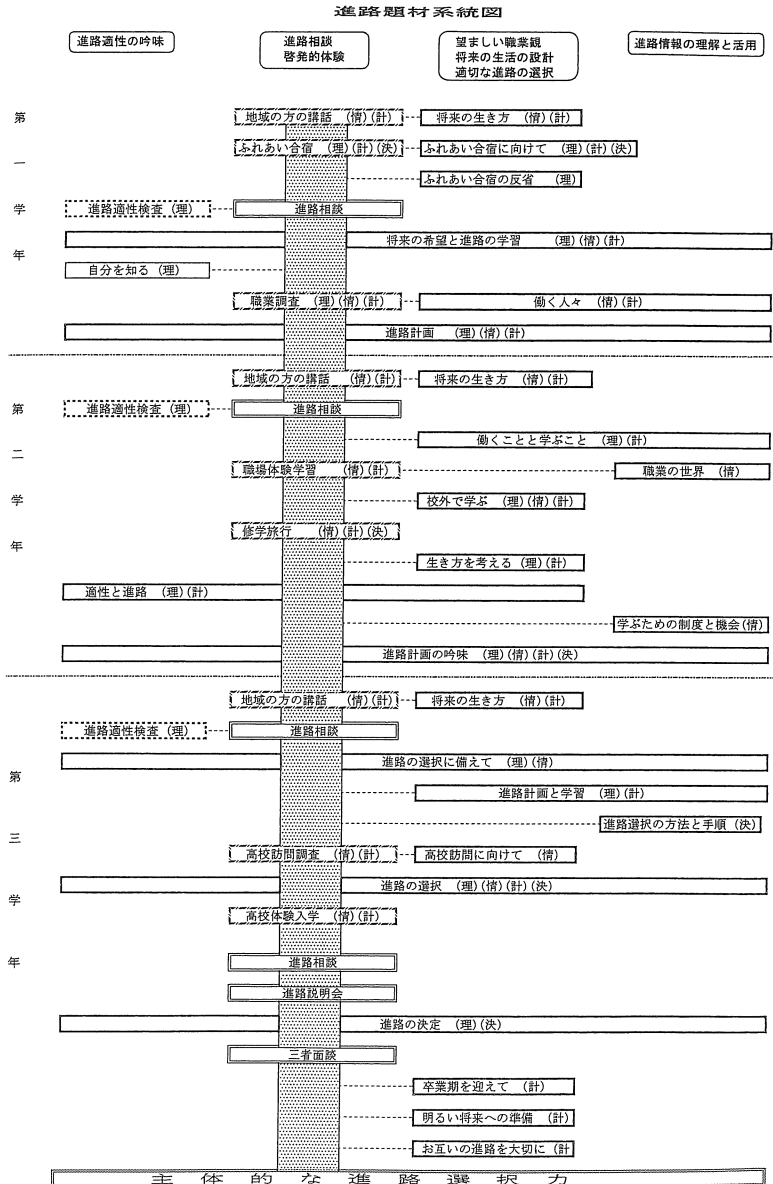
〈視点4〉一人ひとりの個性に応じた教育をどうしたら実現できるかの視点が重要である。

個性 individuality は、広義では能力 ability（知能・技能）、気質 temperament（感情的特性）、性格 character から形成され、他者との相違によって明確化された個人の特性である。

教育活動の推進にあたっては、のぞましい人間関係を基盤にして、発達の可能性を信じての指導、発達の程度に応じた指導、個人の特性を大切にしたい指導、主体性を大切にしたい指導に努めるべきである。

京都大学教授 梶田叡一氏は、資料(16)「学習者の特性に対応するための教育方策⁽³⁰⁾」について次のようにのべている。

資料(14) 進路題材系統図 天拝中学校 (1996年)

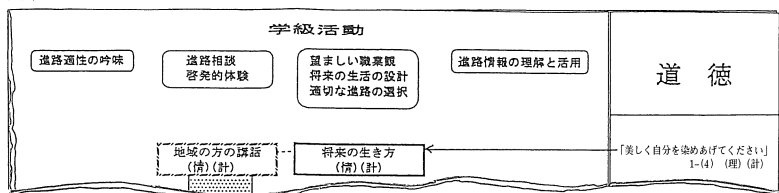


(注)「理」は自己理解、「情」は情報収集・活用、「計」は、進路計画を表示している。

資料(15) 学活・道徳・教科における進路題材系統・関連表

学 期	教					科			
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭	英語
1	学習の仕方 を学ぶ 「読書はうたう」 (理)-1、2 (計)-1	世界の国々 (計)-1 人々の生活と環境 (理)-1	正の数と負の数 (理)-1	植物の生活と環境 (理)-1、2 (決)-1	耳の役割 (理)-1、2	オリエンテーシ ョン (理)-1 展覧デザイン (理)-1、2	集団行動 作り作り 作品作り 専攻運動の仕方 集合・整列の指導 (理)-2、3	【技術】 ふと生活 身近な木製品 (計)-2	Pro1 ようこそエミリー (理)-1、2

(第1学年)



資料(16) 学習者の特性に対応するための教育方策

特性をどうするか	どういう方法で対応するか	具体例	どういう特性についてか	教科・領域への適用など
A 区 分	A1 必要な学習時間の区分	・飛び級、落第 ・補習	・学力	・特に理数系、技術系、 芸能系
	A2 能力・適性等による コースの区分	・能力別(習熟度別)学 級編成 ・能力別の学校、コースの設置	・能力、適性 ・学力	・特に理数系、技術系、 芸能系
B 調 整	B1 学習レイタンスの 事前調整	・事前評価に基づく事前の 治療的指導	・学力(前提能力)	・特に理数系、技術系
	B2 学習レイタンスの 逐次的調整	・授業中、単元、学期、 学年での目標到達状況 確認に基づく補充指導	・学力(目標到達状況)	・全教科、領域
C 発 揮	C1 共通課題系列を個別 のペースで	・プログラム学習 ・CAI	・学力と能力、適性	・特に理数系、技術系
	C2 自分で選んだ課題を 自分なりに	・個別課題の追求	・興味、関心 ・能力、適性 ・学力	・特に芸能系、理科、 社会 ・総合学習

(出所) この資料は、京都大学文学博士 梶田叔一「たくましい人間教育を」1964年金子書房188-189ページから掲載したものである。

「一人ひとりの個性を伸ばす教育をしようとする場合、学校教育においては大きく分けて三つの発想を同時にふまえて考えないといけない。第一は、まず一人ひとりの能力や他の特性の点で区分する発想……学習者を区別して、時間のかけ方の違いで対応する。もう1つは、コース分けで対応する。

第二は、個人差の調整という考え方で、B₁ 学習レディネスの事前調整 B₂ 学習レディネスの逐次的調整……つまり、単元ごとに形成テストで診断し、個別の補充学習をし次に進む。第三は、一人ひとりが自分の個性の違いを発揮するという行き方。以上三つの類型、それを区分して、一人ひとりの特性に対応する6つのやり方がある。どれが1番正しい方法というのではなく、どれも正しい…」自分の学校なりに、自分の教科なりに、広い目配りをもって研究開発を進め、実践していかななくてはならない旨をのべている。

〔改善点〕

筆者らの天拝中学校での実践で「わかる授業」に努めれば、学習への意欲、取り組みが良くなる、また、進路の目標を持たせる指導をすれば学習への意欲もさらに高まるとの共通理解で努力したが、この辺の実証的考察が足りなかった。

梶田叡一氏の言う、特性に応じた指導の方策での実証的考察が必要である。

〈視点5〉キャリア教育にあたっての視点として、道德教育の充実がある。

中学校学習指導要領（平成10年12月）第1章総則第1教育課程編成の一般方針の1項で「学校の教育活動を進めるに当っては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し…」とのべ、2項では「道德教育を進めるに当っては、教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに、生徒が人間としての生き方についての自覚を深め、家庭や社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道德性の育成が図られるよう配慮しなければならない。』⁽³¹⁾とのべている。

さらに、第6の2(4)「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導

を行うこと。』⁽³²⁾

筆者らは、天拝中学校において毎時間の指導過程での「展開の概要」について再考し、研究主題との関連表（前掲資料(15)）を作成して職員の共通理解のもとに実践に努めた。

筆者らは、職員研修で内的自己のあり方について、梶田叡一氏の考え方を参考にさせていただいたが、その一部をあげてみたい。

『「こころ」という言葉は、「内面世界」と言い換えることができます。内面世界とは、何よりもまず、一人ひとりの内面のスクリーンに映っている光景であり、また、そうした光景のどこにどうこだわる、といったその人の内的な反応のあり方です。これは、一人ひとりに対して現象的に与えられている世界、その人によって生きられている世界と言うこともできます。しかし、内面世界はそれだけのものではありません。意識的で現象的な世界の背後に、それをそのような形で成立させている何かを想定せざるをえないのです。ここでは、これを「内的自己」と呼んでおくことにしましょう。

この内的自己は、個々人の意識的で現象的な世界のあり方から、その様相をある程度まで推察できるものはありますが、何らかの形で直接的に観察可能な実体ではありません。内的自己は、基本的には、各自の現象的世界のあり方を総合的に理解するための構成概念なのです。……こうした意味での「内的自己」については、少なくとも以下のような点を確認しおいた方がよいと思います。

- (1) 「内的自己」は、各自のハードウェア（心身の諸機能）的土台に枠付けられつつも、その人の累積された体験と、その意識的無意識的な経験化を中核として形成される。
- (2) 「内的自己」は、意識された世界の情景に確固とした基礎を与える実感・納得・本音を、その重要な要素として持つ。
- (3) 「内的自己」は、意識された世界に、ある方向への「渴き」や「促し」（衝動や欲求、希求）をもたらす。
- (4) 「内的自己」は、さまざまな情報を統合し、一つの結論・決断へと導

く道筋（時には合理的、時には心情的）を準備する。

いずれにせよ、内的自己に支えられた意識的で現象的な世界という内面世界のあり方、そうした内面世界に支えられると同時に、外部からの期待や要求にも十分応えることのできる自己提示のあり方こそが望ましいものなのです。したがって、さまざまな形で現れている障害を乗り越え、そうした「健康なあり方」に近付くよう教育していくことこそが、人格教育、人間教育の基本課題と言ってよいでしょう。われわれが従来、「自らの実感・納得・本音に根ざした発言・行動ができる人間を育てること」さらには「各人が依って立つべき実感・納得・本音の世界が豊饒なものへと深まるよう、くゆさぶられる体験」く反省・自覚く話し合いによる相互の練り上げ等を重視した教育を進めること」を提唱してきた趣旨がこうした基礎を持つことを、ここで再確認する必要があるのではないのでしょうか。』⁽³³⁾と重視すべて諸点をのべている。

〈視点6〉職業的体験活動を重視して勤労観・職業観の育成が重要である。

筆者は、学校管理経験者として、管理上、安全上、無理のないように、でき得る限り、教育の中に職業的体験（進路指導で言えば啓発的経験）の場を多く取り入れることが大切であると考えて実施した。

筆者らの実践では、地域にある、保育所、幼稚園、病院、診療所、消防署、役所等への体験学習を計画的に実施した。資料(17)はその一例である。修学旅行での鹿児島では、働く人々へのインタビューをするなど学校行事企画の中で意図すればできる。修学旅行の宿泊での、学習時間も計画すれば、職業調べの結果報告会も可能である。

大切なことは、このような体験取材を持ちより、教室学習に広めることになれば、進路の学習も一段と活性化され効果も期待される。

〈視点7〉職業観、勤労観の育成の大切さである。

視点6で取り上げた体験活動は、時間的にも制限があり、受け入れ先の都合もある。

職業指導時代では、職業科の第6群で職業分類表の生徒への提示もあって、

資料(17) 消防署の体験学習 T 市消防広報より 1995年

中学生!! 体験入署

私は職場訪問で消防署へ行きました。まず自分の体でホースを使って水をかけたり、はし車に乗ったりふつう体験できないことをしてよかったです。

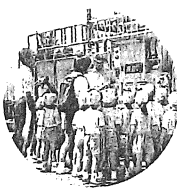
そしていろいろなことを学び、生命の大切さや、人々との助け合いなど大切なことを学びました。市民のために夜も出勤して自分の命も惜しまず火を消すということは、とても大変なことだと思つたし、すばらしいことだと実感しました。

又、救急隊員の人も消防士の人とは一味違う人助けをしていました。例えば救急車の中で素早く応急処置をしたり、脈、血圧等を計ったりしてその人の健康状態を調べたりと、救急車の中でも冷静さや平常心を忘れずにてきぱきと仕事ができるということばすこいと思ひました。私だったら、絶対に「こういうことはできない」と思ひました。

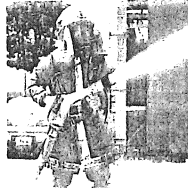
職場訪問をして学んだことは沢山ありましたが、生命の大切さが一番心に残りました。最後にいろいろなと詳しく説

明して下さったり、忙しい中、職場訪問をさせて下さった消防署のみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

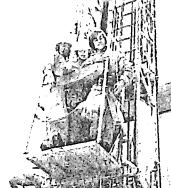
※ この投稿は筑紫野市の中学生が夏休み期間中に職場訪問に来られたときの感想文です。



消防車に乗って



放水訓練



はし車に乗って

職業に関する理解をさせた時もあった。しかし、職業の世界を全体的に把握することは出来ても、一つ一つの職業について理解させることは、なかなか出来なかった思いを持った担任教師は少なくない。この時代の教師は、現行の学校教育法36条二「社会に必要な職業についての基礎的な知識…」を意識しながら、その達成に向け努力したが、現在の学習指導要領では、時間の獲得が出来ない。

生徒にとっては、職業の世界についての十分なる理解が必要と言っても、多くの職業の基礎的理解を得させことは、むずかしく、考慮されるべき課題である。

こうした制約ある学校教育に少なくともそれに近い効果をあげる方策はないのか。職業観・勤労観育成についての現場教師の取り組むべき課題がある。

社会科の教師は例外としたいが、現場教師には、産業分類表、職業分類表の存在すら知らず、かつての教師は、教材の中でも最も重要なもののなかのひとつであった。

筆者は、生き方の教育としてのキャリア教育にあたって、これまでの経験

資料(18) Outline for study of an occupation. George E. Myers

1. Importance of occupation.
2. Nature of the work.
3. Working condition.
4. Personal qualities needed.
5. Preparation needed.
6. Opportunities for advancement.
7. Compensation.
8. Advantages and disadvantages.

(出所) この資料は、GEORGE E. MYERS 「PRINCIPLES AND TECHNIQUES OF VOCATIONAL GUIDANCE」 1941から掲載したものである。

をふまえて、次のことを提言したい。

進路情報は、生徒にとって未知で未経験な進路の世界を展望させ、適切な進路計画の樹立や進路選択、ひいては将来における職業的自己実現に役立たせる重要なものである。

さて、原点にかえって、かつて実践してきた、職業についての理解で、筆者は次の George E・Myers University of Michigan が示す、職業研究の筋書き⁽³⁴⁾を参考にしてきた。

生徒にとって、身近かで、興味ある職業を取り上げ、このアウトライン、なかでも、その仕事の重要性、その仕事をする上で必要とされる個人的な性質、労働条件等を参考にして職業調べの学習項目（ワークシートづくり）にして学習させるなど職業調べの方法を習得させることが大切である。こうした職業調べの学習を他の職業調べに広め、深めることによって、職業、仕事についての見方・考え方を持たせるなどして、のぞましい職業観・勤労観の育成に生かしてほしい。

〈視点7〉相談室の設営とキャリア・カウンセリングの重視

筆者は、中学校長としての管理的立場から、進路相談室の設営に努力した。

キャリア・カウンセリングは、進路（キャリア）における問題に適切に対応し、主体的な生き方、選路選択力にもとづいた進路選択・決定を可能にす

る、非指示的な相談で主体性の重視で、治療的な臨床心理カウンセリングにとどまらず、開発的なキャリアカウンセリングである。実際には、個人理解の方法、学校・職業等に関する総合的情報、キャリア発達に関する十分な認識をもち、人間を発達的にとらえて支援する技能、カウンセリングの基本的技能を備えた、担任または、キャリア・カウンセラーが行うものである。進路相談室を設営し、対象とする生徒 client に対し教師 counselor は、「進路相談の進め方」⁽³⁵⁾（資料(19)）を参考にして精進していただきたい。

資料(19) 進路相談の進め方10カ条

① 「自然な態度で快く迎えるようにする」

いざ相談となると、生徒は緊張したり不安を感じたりするものであるから、そうならないように十分配慮しなければならない。しかし、平素とまったく異なる態度、わざとらしい態度にならないように注意する必要がある。

② 「気楽な雰囲気で話させるようにする」

相談で大切なことは、生徒に自分の考えなどを自由に話させるようにすることである。換言すれば、教師は「よい聞き手」になるということである。教師の態度などが堅苦しいものになっていたのでは、生徒の口は重くなるばかりであることに十分留意しなければならない。

③ 「親しみやすい言葉や分かりやすい言葉を用いるようにする」

生徒に自由に話させるためには、前記のことに相まって、教師の言葉づかいに注意することが大切である。生徒に威圧を与えるような言葉、専門的で難解な言葉をつかわないように注意しなければならない。

④ 「親近感をいっそう高めるようにする」

生徒に自由に話させるためには、生徒は「どんなことを話しても悪く評価されることはない」、「秘密は必ず守ってもらえる」、「何でも話してみよう」というような安心感をもたせるようにしなければならない。そのためには、相談中においても、受容的・肯定的態度をとるなど、親近感をいっそう高めるように配慮する必要がある。

⑤ 「自然に問題の核心に触れていくようにする」

相談の内容（問題など）によっては、できるだけ触れられたくない、という気持になる生徒もいるが、そうした心理も洞察しつつ相談を進める必要がある。相談を急がないこと、生徒の心を解きほぐすようにすることなどに留意しなければならない。

⑥ 「生徒の話に十分耳を傾けながら、その内面をより深く理解するようにする」

生徒の言葉は1つでも聞き落としのないように注意し、生徒は何を言っているのか、何を考えているのか、何を問題としているのか、事実何が問題なのかなど、生徒の心の内面を深く理解するとともに、生徒自身にも理解させるようにすることが大切である。

⑦ 「指示とか非指示とかにこだわることなく、必要によって教師の考えも1つの意見として適切に話すようにする」

ここでいう「指示」とは、教師が生徒のもつ問題は何か、その解決のためにどんな知識・情報を必要とするかなどを診断し、生徒に必要な資料を提供したり、助言したりして、今後とるべき行動を決定させるようにすること（カウンセリングで「指示的相談」といわれるもの）である。「非指示」とは、教師は熱心な聞き手となり、生徒に自分が感じている問題や悩みなどについて自由に発言させ、教師はそれをすべて受容しながら、生徒自身に解決について考えさせ、今後とるべき行動を決定させるようにすること（カウンセリングで「非指示的相談」と言われるもの）である。この2つのどちらがよいのか、どれにするかなどにこだわるこ

となく、（カウンセリングで両者の長所を取り入れたものを「折衷的相談」という）生徒個々の問題などを的確に把握し、その解決のために「よい聞き手」、「よい助言者」となって相談を進めることが重要である。

⑧ 「生徒の質問には必要によって資料を示しながら適切に答えるようにする」

生徒のもつ進路の問題などは、知識・情報などの不足によるものが少なくない。したがって、相談中においても、それにかかわる質問が出されることになるが、それに対して、抽象的に答えるのではなく、あらかじめ用意した資料などを提示して具体的に答える必要がある。

⑨ 「生徒自身が問題などに対する自己決定をするのにふさわしい相談となるように配慮する」

相談でもっとも大切なことは、生徒が今後においてとるべき行動を、自分の意志で決定し、それに基づいて実際に行動するようになることである。仮りに、教師の助言などがかなり含まれた相談になったとしても、生徒自身が「自分はこうする」というように意志決定をしたのであれば、それに問題があるはずもない。しかし、教師の押し付けによって、生徒がやむなくそれに従う、という結果にならないように、厳重に注意する必要がある。なお、今後の行動への意欲づけ・勇気づけなどについても十分配慮しなければならない。

⑩ 「相談中の生徒の心の動きや態度などの変化に注意し、必要によって再相談をするようにする」

相談によって、生徒がどのように意思決定をしようとしているか、生徒の表情や言葉などによる反応に注目し、状態によっては再度の相談を実施するようにする必要もある。問題や悩みなどが複雑な場合など、結論を急がせないようにすることも大切である。

(出所) この資料は、小竹正美・山口政志・吉田辰雄「進路指導の理論と実践」日本文化科学社2000年84-86ページから掲載したものである。

〈視点8〉指導計画の1時間、1時間の確実な実施と評価及び教師の授業に関する研修の充実

学校においては、進路指導の全体計画、年間指導計画は一応、樹立されているが、行事のために授業が欠ける場合が多い。授業の管理は、管理職にあるが、教務主任に任せられているところもある。若い教師であればなおさらのこと、欠けた時間の補充がうまくいかず、計画的な授業が不十分になることは、筆者のかつての指導主事経験からも言える。計画的な授業時間が確実に実施される努力が大切である。

学級をあずかる教師にとっては朝の会から始まり、教科指導、給食の指導、清掃指導、帰りの会まで、その間の生徒指導等で実に多忙を極める。特に、若い教師の場合その指導力が問われるのが現状である。

さらに、若い教師を含めて、教師の授業に関する実践的指導力を身につけることに加えて、評価が十分になされているかが課題である。

筆者らは、資料(20)にある学習指導を資料(21)のチェックリスト項目と観察評価記録を相互に出し合い教師の力量アップに努めた。

〈視点9〉小・中・高校連携してのキャリア教育

本稿2(2)でのべたように、小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を実施する必要があることを、平成11年12月中央教育審議会が答申している。そして、平成17年10月の同審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」のなかで、小・中・高校の各段階を通じてのキャリア教育の必要性をの

資料(20) 校内研修検証授業学習指導案

第1学年4組学級活動指導案

1. 題材名 「自分を知る」

2. 指導観(8分)

3. 指導目標

- ・進路選択には、個性や能力、適性についての自己理解が必要であることに気づかせるとともに、自分を理解するための関心を持たせる。
- ・自己分析シートの記入を通して自分の特徴をつかませる
- ・他者分析を相互に行いあって、自分で気づかなかった自分の特徴について知り、アドバイスを生かしてこれからの努力目標などを考えさせる。
- ・自己理解に基づいて進路希望や計画を確めさせ、自分を一層伸ばそうとする意欲を育てるようにする。

4. 本時 平成7年 11月24日(金) 第6校時 1年4組教室にて

5. 本時

(1) 本時の指導観

生徒は、自分の特徴についての自己分析を際に行い、自分なりに自分の長所をまとめている。その結果、自分のことに関して、少しは客観的に見えるようになってきた。しかし、この段階ではまだ視野も狭く自己理解も十分ではない。

事前に、班員4名について他者分析カードを作成し、長所・アドバイスをメモ記入している。さらに同じ項目を自分でも分析し提出している。本時はまず、先日行われた文化発表会の取り組み、反省を通して自分たちの気がつかないところを発見することの目的意識を持たせる。

次に、友達から見た自分を分析し、自分の気づかなかった長所に気づかせる。さらに自分の評価と異なる分析について考えを深め、新しく発見した自分をまとめる。これらの活動を通して、日頃自分に自信を失いがちな生徒を励まし、自分自身の伸ばしていくべきよさや、個性を知るとともに、自己のよさをいかし充実した生活を送ることについての自覚を高める。また、本時の学習で発見した自他の長所を認め合い、励ましあってよりよい学級集団をつくっていく意識を高める。

(2) 本時の主眼

友達からの分析・アドバイスを通して自己理解を深め、自己を向上させようとする意欲と姿勢を身につけさせる。

(3) 本時の授業仮説

- ① 自己分析や他者分析で自他の長所に気づき、自己理解を深めることができれば、② 自己を向上させようとする意欲と姿勢を身につけることができるであろう。

(4) 仮説検証の手だて

- ① 自己分析と他者分析との両面から自己像を捉えようとしているか。
- ② 自己分析と他者分析とを比べて気づいたことから改善点をあげることができているか。

(5) 事前の指導

短学活

- ① 自己分析プリントを使って、自分の特色についてまとめる。
- ② 相手のことを客観的、肯定的に分析できるように留意し、他者分析を相互に行い、長所を発見し、アドバイスを記入する。

(6) 準備

板書用カード、文化発表反省表とビデオテープ、VTR、自己分析カード、他者分析カード(一人づつ封筒に入れておく)

学習プリント、学習の感想プリント(For Myself カード)

(7) 指導過程

段階	学 習 活 動 ・ 内 容	指 導 上 の 留 意 点	形態	配時
気 づ く	1. 本時のめあてを知る 自分について知ろう (1) 文化発表会のビデオを見る (2) 本時の学習の進め方について説明をきく	・ 自分たちの感想と他クラスの感想、更にビデオで客観的に見ることを通して、自分たちの気づかない所を発見することの目的意識を持たせる。 ・ 個性もその人の一面であること、決めつけてしまわず別の見方もできることを理解させる。	一斉	7分
	2. 友達から見た私を分析する。 (1) 班内の友達が記入したカードで資料を作る (2) 分析から気づいた自分をまとめる。 (3) 数名の友達の発表をきく。 3. 自分をさらに伸ばすための改善点を考える。	・ 他者分析を録で結びチェックしながら、自己分析との違いに気づかせる。 ・ 自分の評価と異なる分析について考えを深めさせる。 ・ 自分についてどれぐらい知っていたのか考えさせる ・ 新しく発見した自分に気づかせ、その伸長への努力を促す。 ・ 新しく発見した自分について、数名の生徒に発表させる。 ・ 日頃、自分に自信を失いがちな生徒を励ます。	班 個 一斉	25分 10
ま と め	4. 本時のまとめをする。 (1) 教師の話聞く。 (2) 学習の感想を書く。	・ 自己評価や相互評価によって得た自己像をしっかりと把握することによって、自己の発達を図っていくことができることを理解させる。 ・ 本時の学習で発見した自他の長所を認め合い励ましあつて、よりよい学級集団を作っていくよう励ます。	一斉	8分

(8) 事後指導

- ・ 自己理解に基づいて、進路希望や計画を確かめさせ、自分を一層伸ばし、今後の生活に自信をもって取り組めるように励ます。
- ・ 個別相談を実施し、生徒一人一人の自己理解がより一層深められるよう援助するとともに自己を伸ばしていくための、課題を明確にさせ、その改善、充実に努力させる。
- ・ 自己を伸ばすための努力目標を書き、教室に掲示し、自他の長所を更に伸ばし、よりよい学級集団を作っていくように指導する。

(9) 評価の観点

- ① 自己評価や相互評価によって得た自己像をしっかりと把握しようとしているか。
- ② 自己像の把握が、自己を向上させようとする意欲につながっているか。

(出所) この資料は、筆者らが、天拝中学で実施した校内授業研修(1995年)指導案を掲載している。

資料(21) 授業観察記録カード（授業のチェックリストと観察評価）

授業観察記録カード		左の欄で気づいたことを、具体的に書いて下さい。
<p>（学情・道徳・教科）</p> <p>実施 平成7年/月24日（金） 第6 校時</p> <p>年 / 学年 4 組</p> <p>主 題 名 <u>自分と未来</u></p> <p>授業者 <u> </u></p>		<p>1. 授業のねらいについて</p> <p>1年生の目標、自分の将来の進路への関心・意欲を高める。 自己理解に促して進路選択や進路計画に資する考え方を養う。（全体討議）があるが、他者分析と自己理解の両方を高め、自己を向き合おうとする意欲と姿勢を身に付けようという意図が感じられる。</p> <p>2. 教師の指導について</p> <p>① 落ち着いた、進路の学習にふさわしい雰囲気づくりができていた。</p> <p>② セルフイメージを持つことの意義をもとに理解させる工夫が大切。</p> <p>③ 自分について矢張り（反意分析カード）、アドバイスの用意がよく適切に活用され、生徒も意欲的に取り組んだ。</p> <p>④ 事前指導が十分に記述されている。</p> <p>3. 生徒の活動について</p> <p>① 事前に矢張りで、他者分析と相互に行い、よき含むアドバイスが与えられて生徒は興味深く非常によい。</p> <p>② 自己についての学習で、学級が静かになり雰囲気は静かになっていて、静かにしゃべっており、記録も改善点もよく書かれている。</p> <p>③ ほとんどの生徒が肯定系自己イメージを描いており、みんなのよい。</p> <p>④ 本時の授業後には概ね満足できたと感じられる。（もっと分析記録の充実を）</p> <p>4. 指導要その他について</p> <p>・反意分析の指導が非常にいい。また、「マインドマップ」による自己理解深掘の工夫、ジョハリの窓、自己分析表等がよい。さらに指導事項分野生での指導もよかった。</p>
<p><授業のチェックリスト></p> <p>1. 授業のねらいについて</p> <p>(1) 授業のめあては明確であったか。</p> <p>(2) 生徒はめあてをつかんだか。（ねらいは達成されたか）</p> <p>(3) 仮説・ねらいにあった指導過程であったか。</p> <p>2. 教師の指導について</p> <p>(1) 発問の意図が明確であったか。</p> <p>(2) 生徒の多様な考えを引き出す発問を工夫したか。</p> <p>(3) 子どもの考えを生かしたか。</p> <p>(4) 子どもが活動し、考える場が設定されているか。</p> <p>(5) 生徒の発表や活動に対し、適切な援助・評価がなされたか。</p> <p>(6) 板書の文字の大きさは適当か。</p> <p>(7) 板書は考えをまとめ、照めるものになっているか。</p> <p>(8) 内容が適切にまとめられた板書になっているか。</p> <p>3. 生徒の活動について</p> <p>(1) 先生の語や友達の発言を真剣に聞いているか。</p> <p>(2) プリンに書いて、ノートにまとめているか。</p> <p>(3) 考えを整理しようとしているか。</p> <p>(4) 班の活動に積極的に参加しているか。</p> <p>(5) 自分なりに考えようとしているか。</p>	<p>評価</p> <p>1. 授業のねらいについて</p> <p>(1) 授業のめあては明確であったか。</p> <p>(2) 生徒はめあてをつかんだか。（ねらいは達成されたか）</p> <p>(3) 仮説・ねらいにあった指導過程であったか。</p> <p>2. 教師の指導について</p> <p>(1) 発問の意図が明確であったか。</p> <p>(2) 生徒の多様な考えを引き出す発問を工夫したか。</p> <p>(3) 子どもの考えを生かしたか。</p> <p>(4) 子どもが活動し、考える場が設定されているか。</p> <p>(5) 生徒の発表や活動に対し、適切な援助・評価がなされたか。</p> <p>(6) 板書の文字の大きさは適当か。</p> <p>(7) 板書は考えをまとめ、照めるものになっているか。</p> <p>(8) 内容が適切にまとめられた板書になっているか。</p> <p>3. 生徒の活動について</p> <p>(1) 先生の語や友達の発言を真剣に聞いているか。</p> <p>(2) プリンに書いて、ノートにまとめているか。</p> <p>(3) 考えを整理しようとしているか。</p> <p>(4) 班の活動に積極的に参加しているか。</p> <p>(5) 自分なりに考えようとしているか。</p>	

（出所）この資料は、筆者らが、天拝中学校で実施した校内授業研修（1995年）記録から掲載したものである。

べている。

筆者は、平成6年より3ヶ年間、文部省研究・委嘱を受け、キャリア教育の実践にあたった。

ここにあげる実践は、中・高校の連携でのものであるが、その成果をあげると次の点があげられる。

- ① 中学校から福岡県立の高校へ、また、高校から中学校へ、一名ずつの人事交流2年間（研修派遣）を含む中・高連携の研究で、互いに在籍校への実施報告があり職員相互の研修が深められた。
- ② 中学校での授業研修会に高校教師が参加、また、高校での授業研修会に中学校教師が参加しての授業研修、また、カリキュラム学習会、意見交

資料(22) 中学校での授業等研修会日の高校教師の感想意見

(高校教師10名参加)

項目	感想等	人数	項目	感想等	人数
中学校における進路指導の現状認識	<ul style="list-style-type: none"> ・中・高連の重要性再認識した。 ・教師の情報交換が適正進路指導の力である。 ・偏差値からの脱却、本質的進路指導に非常に新鮮な感じ(関心した)。 ・将来の目標、自分の特性を考え、自己決定できる指導に感心した。 	●● ●● ●● ●● ●● ●●	評価活動	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい学力観に基づき評価がなされたい。へんよい。 ・興味・関心、意欲等の把握がなされ(重視され)参考になった。 	●● ●● ●● ●●
中学校の授業・生徒の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が授業に積極的に参加、挙手発表踊跃、発表する雰囲気づくりに感心。 ・英語科のオラルコミュニケーション表現活動にびっくりした。 ・理科で中高内容の関連がはっきりした。 	●● ●● ●● ●● ●● ●●	中学生の学校選択意識の現状認識	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の進学意識(何で進学したいとか)が分かった。 ・興味、進学基準にしている率が高いとはよい。目的意識と持て、入るべく生徒らしく、なりたいよう、充足した高校らしい。(自覚できていた)。 	●● ●● ●● ●● ●● ●●
給食を通して(一緒に給食)	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に給食は、実に貴重な体験だった。唯々新しい給食だった。 ・余事を話して色々と質問され、自分も質問でき楽しかった。 	●● ●● ●● ●●	清掃活動等を通してその他	<ul style="list-style-type: none"> ・給食、清掃と一緒に活動させていただき、3年生は高校のこと色々と聞き取れたようである。音声が録音、時間不足に残念だった。 ・清掃態度は、明らかにおめな表情で中学校教員の現れ方がある。 	●● ●● ●● ●● ●● ●●

(出所) この資料は、「中・高連携研究報告書」(1995年 天拝中学校)より掲載したものである。

換会等を通して、中・高校の学校生活のようすが理解できてそれぞれの進路発達課題に応じた指導を実践することが出来た。資料(22)は、中学校研修会場での高校教師の感想意見である。

〈視点10〉生徒・保護者がともに、知る・学ぶ「進路だより」と地域・保護者との連携がキャリア教育では大切。

資料1は、進路に対する考え方・今後の進路を考える心構えを内容としたもので、資料2は、卒業生からのメッセージ、資料3は、働く人々の姿を知ろうの進路学習に対する保護者の感想をあげたものである。

こうした「進路だより」は、生徒にとっても、保護者にとっても、興味深くうけとめられ、生徒と保護者(親)の絆を強くし、共に学び、進路選択のみならず、将来の生き方への関心を高める効果がある。地域にも必要に応じて配布したり、地域懇談会に用いたりして、学校教育に関心をよせてもらい

地域の方々に多くの協力をいただいた。

キャリア教育では、こうした地域の方々の協力は欠かせないもので重要な視点である。あわせて、筆者がまとめ、保護者向けに活用した。「親の在り方十か条」(資料(24))をあげておきたい。なお、この資料は、キャリア教育の天拝中学校での研究実践の成果とともにVTR集録をして活用した。

以上、先導的実践一中・高連携研究実践から、キャリア教育の在り方〈視点1～10〉についてのべてきた。

本稿1(1)でのべたように、1999年12月の中央教育審議会答申で「キャリア教育(望ましい職業観・労働観及び職業に対する知識や技能を身につけさせると共に、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と記されて以来6年目を迎える。のぞましいことに、小学校において、キャリア教育の実践が広がりを見せている。

資料(23) 進路だより『MY WAY』

【資料1】進路学習に向けて(一部)

進路 って…なんだろう？

「進路を選ぶ」とか「進路を決める」などよく言いますね。
「進路」って、なんでしょう？ 考えたことがありますか？

「進路」という言葉には、こんな意味を含んでいるんです。」

- ◇ 中学校を卒業したら、どの道に進むのか。
進んでいくコースを意味するとき(進学先や就職先の選択)
- ◇ 将来、何になろうとするのか。
進んでいく方向やめざす職業を意味するとき(職業の選択)
- ◇ 将来に向かって、どんな生き方をしていくのか。
自分にとって、何が大切かを考え、生き方を選ぶという
意味のとき(生き方や価値観の選択)

「進路」って、こんなにいろいろな意味で使われます。
だから、中学校を卒業するとき、就職するのか進学するのかどこに就職するのか、どこに進学するのかだけを考えればいいというわけではないのです。

将来自分はどのような生き方をしたいのか、どのような理想をもって生きようとするのかなど、道徳や学活の時間だけでなく、学校生活のいろいろな活動を通じて、しっかり考えていきましよう。

【資料2】卒業生からのメッセージ

卒業生からのメッセージ

自分の進路についてしっかり考え、将来の職業生活や生き方に目標を定めて、今年3月、天拝中学校を卒業していったみんなの先輩から、メッセージが届きました。

天拝中学校のみなさんへ

私は太宰府高校の英語科に、この春から通っています。

私は、推薦入試だったのですが、今、みなさんの中にも「推薦入試を受けたいなあ」と思っている人もいると思います。推薦入試を受けるためには「なぜ、その高校に行きたいのか」「自分の将来の目的に合っているのか」など、自分のこれからを真剣に考えなければなりません。もちろん、日頃の学校生活の態度も重視されてきます。私の場合「英語を話せるようになり日本語を外国の人たちに教えたい」という夢があり、そのために太宰府高校しかないと思い受験しました。

実際に入学してみると、きついです。英語の授業は週8回あり、文法・語表現(全て英語)・オーラル(listening&の授業に分かれます。朝限外は、7時50分からで、国・数・英を日替わりでします。課外の英語は文法中心です。でも、きついくれど、放課後などはすごく楽しいです。

(早弁はとってもおおいいです。)

みなさんも、行きたい学校めざして頑張ってください。

太宰府高校英語科 ○○○さん(Ⅲ 缶胴服)から

* ほかにも、先輩から進路や勉強の仕方などのメッセージが届いています。次回は紹介します。

【資料3】進路学習「地域の方の講話」の保護者の方の感想

MY WAY

筑紫野市立天拝中学校
進路だより No. 2
平成8年5月27日

進路学習「働く人々の姿を知ろう」

— 地域の方々のお話を聞こう —

4月30日、進路学習で生徒の皆さんに身近な地域の方から「生き方や職業」などについてお話を聞くことができました。各学級1人ずつ、12名もの地域の方が、生徒の皆さんのために、自分の仕事について、その職業につくまでの自分の歩んだ道、生き方、仕事をしていくうえでの苦労や喜び、今までの人生から学んだこと、そして、若い皆さんへのアドバイス・希望などを、おもしろくわかり易く、一生懸命に話してくださいました。

その日は授業参観でしたので、参観の保護者の方々も、関心を持って、非常に興味深く聞いていらっしゃいました。

生徒の皆さんの感想文やお礼の一言メッセージ、そして保護者の方の感想から、そのほんの一部ですが、紹介します。

★ 大変うれしかったです。私たちは、大隈先生の話を聞いて

◆保護者の方の感想 PART 2◆

★ 親と子が一緒に話を聞いて考える授業は初めてだったので、退屈せず楽しかったです。講師の先生の話は分かり易くて、何か目標をもって進んでいくことは、将来それがどう変わっていくかは分からないけれど、勉強したことはムダにはならないんだなと思いました。私は妻の立場で話を聞きながら、主人も、講師の先生と同じような気持ちで、家族のために働いてくれているんだなと感謝できました。働いて一家を養う苦労を改めて考えさせられ、自分の勉強をさせていただきました。

★ とてもよい企画だと思いました。現役の方のお話を聞くことによって、今からの自分の歩む道が少しでも見えてくるのではないかと 생각합니다。少しでも早い時期に進路を決めることの大切さ、身をもって体験してあるので、力が入っていたと感じました。

◆保護者の方の感想 PART 1◆

★ 大変なになりました。親を大切に、人を大切にする、ものを大切にする、時間を大切にする、あいさつをする、仕事についたらすぐにやめない、等が心に残りました。生徒さんたちの態度も大変よかったです。

★ とてもすばらしい企画だと思いました。私自身も興味あるところで、子供だけじゃもないと感じ、他のクラスの話も聞きにきました。ただ、子供たちがどのくらい興味を持ち、自分の進路について考えたかが問題だと思っています。また、どのくらい身近に感じたか、この子供たちが中三の時期、また試みてほしい企画だと感じました。

★ 子供たちが、今から社会に果立つまでの過程で様々な壁にぶつかった時に、どうやって乗り越えて行くか、また、その壁を乗り越えた時の喜びと充実感を考えるきっかけであり、自分の将来に関心を持たせるチャンスになればいいのではないのでしょうか。

★ 子供には、たぶん初めてのことであったので勉強になったと思います。

★ (母) 働くことの大変さや楽しさがよくわかりました。進水さんの話を聞いて、将来のことについて考えるよい機会になりました。これから、将来やってみたいことを見つけて、頑張っていきたいと思います。(2の1 お礼状時)

★ 子供たちにとって、働くということがまだピンときていないが、今日の話で、今の子供たちの仕事は勉強だということを教えられていた。努力を惜しまず、今の中学校生活しかできないことを、一生懸命頑張っていきたいものです。今日は、こういう時間を設けていただきありがとうございます。

★ お話分かり易く、自分を大切にすることが、その周りの人をも大切にすることになると聞きました。これからいろんな道に進むとき、支えになる言葉になるでしょう。ありがとうございます。

★ 分かり易くお話をいただき、大変ありがとうございます。何か目的を持つと進路も決まりやすくなり、学校生活も有意義なものになると思います。

(出所) この資料は、筆者らが中・高連携研究での「生徒の進路選択力を高める進路指導」(天拝中学校 1995年) 130-131ページより掲載した。

筆者は、キャリア教育を行ううえで、以上のべたことのほかに、次のことをのべたい。

キャリア教育のめざす究極のねらいには、生涯を生きるための、職業的自己実現で、そのためには、研究構想でのべた諸能力育成が大切である。小学校段階からのキャリア教育は、大いに歓迎することである。

A. H. マズロー「人間性の心理学」で「知り、理解する欲求は、幼児期、児童期に見られ、それは成人期よりも強い。」⁽³⁶⁾と云い、さらに、「経験はカラッポ」という語句を自分自身の内部信号を受け入れない人のことをのべる

資料(24) 親の在り方十か条

親の在り方十か条

- 生徒が進路を選択するということは大変難しいことです。親の適切な助言や心配りを待っています。つぎの「親の在り方」十か条を参考にして下さい。
- (1) 子どもの将来の生き方（家庭、職業、社会生活）に常に強い関心をもつ親
 - (2) 子どもの持ち味（長所）は何かを知ろうと努める親
 - (3) 子どもの将来のために、自分の人生観を知らせてやれる親
 - (4) 子どもの進路計画を尊重しながらも、自分が願う将来の子ども像が いえる親
 - (5) 子どもの長所を生かすことを重視し、有名校という幻想に惑わされない親
 - (6) 子どもの進学目的や適性に合った学校が良い学校と確信できる親
 - (7) 子どもの心の動きを察知し、相談にのり、励ましてやれる親
 - (8) 子どもの進路に自信と誇りと勇気を倍加してやれる親
 - (9) 子どもの意志と責任のもとに進路を決めさせられる親
 - (10) 子どもの将来をいつまでも見守り続けようとする親

のに用いたと言われ、「経験の豊かな」人間とは、自己意識を大いにもっている人のことである。教えられねばならず、発達させねばならないものは、この「経験の豊饒さ」⁽⁹⁷⁾と言い、性格形成上の大切さをのべている。

小学校の6年間、そして、中学・高校のそれぞれの発達段階に応じて、経験豊かな人間の育成に努力することになれば、生徒の自己概念形も、職業観・勤労観の育成も十分にできるものと信じている。

おわりに

ひとの仕事は、分水嶺に例えられ、その人の生活の部分はそこから流れ、営まれる（まえがきの Myers のことば）のとおりである。

また、D. E. Super は、職業的発達に関する12命題で、キャリアは、つねに前進する（第1命題）そして、自己概念は、青年期以前に形成しはじめ、青年期において明確になり職業選択的なことばに置き換えられる。」と言っている。今、大学生を見ると、これまでのキャリアのなかでつくられた自己概念形成には、啞然とするものがある。

自己概念は、「自己から認知された対象としての自己であり、自己の行動や態度に関するかなり一貫した認知を意味している。また、これは、行為の経験や反省を基礎とするものであり、その枠組みはもちろん、他者の影響を強く受ける。即ち、社会的に形成される」⁽³⁸⁾ものである。幼児期、児童期からの自己概念形成の課題がある。この意味で、小学校段階からのキャリア教育の必要をつよく感ずるものである。

筆者は、キャリア教育という新しい呼び方であるが、これまで努力してきた、職業指導時代そして進路指導時代のよき指導内容を発達段階に応じて、小・中・高・大学での教育に広げた体系化された、キャリア教育と解している。児童・生徒の育ちを見届けつつ、はげましながら、教え、発達させる生涯に生きる人間形成・生き方形成の教育と考えている。

本稿の前半は、生徒が直面している現状分析を加え、問題とすべき現象形態から進路の指導、キャリア教育の必要性を論じ、後半でそのキャリア教育の在り方を視点ごとに論じた。これからの学校における実践への一助になれば幸いである。

本稿執筆にあたって、各学校で精進されている教師の皆さんに資料の提供などご協力いただき、また教務課の皆さんにご高配賜り心から感謝する次第である。

注

- (1) GEORGE E. Myers Principles and Techniques of Vocational Guidance 1941. MOGRAW-HILL Booking company.
- (2) 文部科学省「中学校学習指導要領－総則編－」1999年9月90-91ページ。
- (3) 文部科学省「中学校学習指導要領－道徳編－」1999年9月33ページ内容23項目135ページ。
- (4) 小竹正美・山口政志・吉田辰雄「進路指導の理論と実践」日本文化科学社1998年30ページ。
- (5) 文部省「中学校・高等学校 進路指導の手引」－個別指導編－1980年9月14ページ。
- (6) 文部省「中学校学習指導要領」1999年10月1ページ。
- (7) 日本進路指導協会「進路指導」1985年1月14-15ページ。

- (8) 文部省「中学校・高等学校 進路指導の手引」－情報資料編－1978年6月 82-83 ページ 傍線は筆者による。
- (9) 伊藤惣右衛門「職業指導の心理学」金沢書店 1957年 165 ページ。
- (10) 文部省「中学校・高等学校 進路指導の手引」－高等学校ホームルーム担任編－(改訂版) 1996年6月 25-31 ページ。
- (11) 小竹正美・山口政志・吉田辰雄「進路指導の理論と実践」日本文化科学社 2000年9月 43 ページ。
- (12) 光友剛他課長・指導主事 25 名「進路指導の手引」福岡県教育委員会 1993年 161-162 ページ。
- (13) 福岡県教育委員会 同上書 10-12 ページ。
- (14) 「西日本新聞」2005年11月19日付。
- (15) 「西日本新聞」2005年11月11日付。
- (16) 「西日本新聞」2005年8月24日付。
- (17) 日本進路指導学会「日本進路指導学会創立 20 周年記念誌」1998年11月 145 ページ。
- (18) 小竹正美 山口政志 吉田辰雄「進路指導の理論と実践」日本文化科学社 2000年9月 30-31 ページ。
- (19) 小竹正美 山口政志 吉田辰雄 同上書 32 ページ。
- (20) 東清和 安達智子「大学生の職業意識の発達」学文社 2003年3月 16-17 ページ。
- (21) 東清和 安達智子 同上書 130 ページ。
- (22) 日本進路指導学会「創立 20 周年記念誌」1998年11月 145 ページ。
- (23) 日本進路指導学会 同書 151 ページ。
- (24) 日本進路指導学会 同書 159 ページ。
- (25) 日本進路指導協会「進路指導」2006年4月号 6 ページ。
- (26) 福岡県筑紫野市立天拝中学校研究紀要「生徒の主體的な進路選択力を高める進路指導－学級活動における実践的活動の指導を通して－」1996年 10-25 ページ。
- (27) 国立教育研究所調査研究報告書 2002 7 ページ。
- (28) 市川伸一編「学力から人間力へ」1005年教育出版 118 ページ。
- (29) 仙崎武「進路指導革新の動向と課題－ミネソタプランに学ぶもの」日本職業指導協会 1973年 26 ページ。
- (30) 梶田叙一「たくましい人間教育を」金子書房、1995年 188-201 ページ。
- (31) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成 10 年 12 月)解説－道徳編－」1999年 120 ページ。
- (32) 文部科学省、同上書、124 ページ。
- (33) 梶田叙一「生き方の人間教育を」金子書房、1994年 188-190 ページ。傍点は筆者。
- (34) GEORGE E. MYERS 「PRINCIPLES AND TECHNIQUES」McGRAW-HILL BOOK COMPANY, INC. NEW YORK AND LONDON 1941 111-112 ページ。
- (35) 小竹正美・山口政志・吉田辰雄「進路指導の理論と実践」日本文化科学社 2000年 84-86 ページ。
- (36) A. H. マズロー著「人間性の心理学」小口忠彦訳 産能大学出版 2003年 77 ページ。

- (37) フランク・ゴープル著「マズローの心理学」小口忠彦監訳 産能大学出版 1980 年 112 ページ。
- (38) 対人行動学会「対人行動の心理学」誠信書房 1995 年 234-235 ページ。